

年

卷

期

第

3

第

1-2

中央亞細亞

第三卷・第一期

特稿

UN PROBLEME DE GEOLOGIE ASIATIQUE LE FACIES

MONGOL P. TEILHARD DE CHARDIN (1)

附上文節譯 裴文中 (二八)

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て 鳥居龍藏 (一)

x x x

說吐火羅語 伯希和撰 馮承鈞譯 (一一)

x x x

西北沿邊圖籍寓目記 (二續) 張紹典 (三三)

中華民國三十三年四月

國立北平圖書館藏

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

鳥居龍藏

(一)

私は『中央亞細亞』第二卷、第二期に於て『契丹と中央亞細亞との服飾の類似』と云ふ小論文を發表したが、今茲に再びその記るさなかつた事を補遺として掲げて見た。

契丹人の衣服は、A・B・C・D等の形式からなり、Aは窄袍で、彼等固有の衣服である。Bは兩襟を折り返した西域式即ちルコックの所謂 *Kragenrock* であり、これはもとイランの衣服で中央亞細亞を経て契丹人の間に用いられたものである。そしてCとDの衣服は、普通のそれとなく、その用いられた範圍も極めて少ない所である。以上に就ては、私は既にその論文中に記した所であつた。

茲に、改めて記す以上B式衣服は、これを更に細かく分類すると、尙ほ甲・乙の二種となす事が出来る。即ち甲は兩襟(雙襟)の折れたものであり、乙は襟が兩方無く、唯だ一方のみ折れて居るのである。契丹畫像を見ると、その多くは甲であるけれども

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

、私の見た所ではその中に唯だ一つ乙の衣服があつた。それは滿洲遼陽縣石祖子の塋墓内壁畫の人物である。この人物は女子で而かも薩滿教(Shamanism)の巫であり、直立して手に同教使用の太



契丹風B式乙種衣服

鼓(鏡らしく見えるが、太鼓である)を持つて居る。この衣服はまさしくBであるけれどもその襟は右方のみ折つて居て、左方は折つて居ない。そしてこの壁畫は畫像石と異なり、塋壁面に漆喰(Mortar)を塗り、その上に墨で描き彩色をしてあるから、その當時の衣服の有様がよく解せられる。この壁畫を見ると、その衣服は淡褐色よりなり、折襟の部分は縁を附け、紅色になつて居る。

左様であるからこの衣服は極めて美しく艶やかであつたであらう。這は單に乙種のみならず、尙ほその甲種に於ても同じであつたであらうと思はれる。

中央亞細亞の壁書を見ると、このB式、即ち折襟式の衣服にはまた以上の甲、乙の兩種が行はれて居たので、これはルコック(三)(四)圖譜によく認められる所である。これがまた延て契丹人の間にも流行したと見て差支へはない。

- (一)石椁子は滿洲國遼陽縣に屬し、太子河畔に在る。此處に遼代の墳墓(構造は畫像石墓と同形)があり、玄室と羨道内の壁面に彩色を施された壁畫がある。この壁畫は玄室の奥壁を除く外は、すべて左右の壁には、人物を夥多しく描かれて居るが、その中に女子は唯だ一人で茲に圖するものがこれである。この人物は薩滿の巫らしく手に太鼓(鏡とも見える)を持つて居る。このスケッチは島居綠子の手になつたものである。黒田源次博士のスケッチも滿洲國立遼陽博物館に所藏せられて居る。
- (二)玄室内壁畫はその左右の壁に對し人物を描いて居るが、この場面は全く薩滿的舞式を示したもので、即ち巫があり、盆に物を捧げる童子があり、その他は殆んど音楽を奏するものである。
- (三)ルコック(假令は本誌第二卷・第二期のうち、私の論文中に引用した A. von Le Coq: Bildatlas zur Kunst und Kulturgeschichte Mittel-Asiens 等)の *Plancher I. A. A. Gränewald: Altnachchristliche Kultstätten in Chinesisch-Turkistan, 1912* の *Pl. B* 式衣服に甲、乙ある事を圖記し居る。

(四)原田淑人博士「西域發見の繪畫に見えたる服飾の研究」中にもこのB式甲。

乙の圖が掲げてあり、また東京、東洋文庫所藏、ルコック採集圖畫寫眞にもこの兩種の圖がある。

石椁子壁畫巫人の折襟を紅色で塗られて居るが、ルコックの中央亞細亞壁畫もそれを見るも、等しく折襟の所は紅色で塗て居る。

(11)

契丹人固有の衣服は、A式、即ち窄袍であるが、そのA式にまた二つの區別がある。この事に就ては、私は本誌第二卷・第二期、私の拙文中に左の如く記して置いた。即ち

更に同墓内：向て右側に描かれた一人の人物は童子であり、この着服は窄袍であるが、これは柩を左に合せて居る。されば這は等しくA式であるとしても、同式のIIと稱すべきものである。しかしこのIIは、この外に見ない。契丹童子の衣服であらうか。

この童子は、⁽¹⁾内部の襟と兩袖の先端は紅色を以てし、衣服全體は太鼓を手にする薩滿巫の衣服の色よりも極めて薄い褐色となつて居る。そして左手に細長い盆を捧げ、その上に齒刷子を載せて居る。⁽¹⁾

この衣服は固よりA式であるけれども契丹普通のそれとは、聊か相違して居る。そして私は契丹人の風俗圖を各所で多く見た

けれども、斯くの如き窄袍は唯だこの國のみであつて、未だ他でこれを見たことは無い。這は契丹人童子の間にのみ行はれたので



服衣種乙式A

あらうか、今後の研究を要するとともに、A式にこの種類のあつたことが知れる。さうすると、またこのA式にも甲と乙の兩種が認められるのである。そこで私は契丹人の男子一般に行はれる衣服は概ね甲の窄袍で、童子の如きは、乙の窄袍を着用したやうに思はれる。

以上乙種の如き襖を合はす窄袍は現今の露西亞土耳其斯坦。支那土耳其斯坦のトルコ民族(Turks)やイラン民族(Iran)の間にも着用せられて居り、更に彼の西藏民族(Tibetans)の間にも着用せられて居る。就中、西藏人の如きは、日中外出の際には、

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

の窄袍の胸邊を殊に太く脹らし、その胸中に種々の品物を入れて居るが、夜となるとこの衣服が夜具となるのである。西藏人は男女の衣服は同一で、石砮子壁畫の衣服の胸邊を脹らして居るのは西藏人のそれとよく似て居ると云つてよい。斯く比較して來ると、石砮子契丹童子の着用して居るA式乙種の衣服は、現今西藏から中央亞細亞に廣く行はるるものと同一であると思はれてよからう。



人ズルキ



人蔵西

(一)鳥居童子のスケッチ
チ。この童子の圖

は、玄室内、向て右方壁面に描かれ、左方の薩滿巫と相對して居る。私はこの人物を童子と認めたが、早くこの墓に行つて調査せられた黒田源次博士のそのスケッチを見るに、この人物の頭髪は、相對する巫のそれと同じく髪を纏らし縮み髻を挿して居るのである。さうするとこの童子と思つたのは童女で

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

あらうか。斯くの如き頭髪はスタインがトルファン附近アスターナ (Asterana) の唐代墓から掘り出した繪面に描いた彩色畫の女子のそれに類似する (A. Stein: Innermost Asia, II, 六五四—六五七頁) この頭髪に就ては改めて記すであらう。

(二) 鬚子に就て、私は昭和八年(民國二十二年)十一月五日、内蒙古小巴林白塔子(現今滿洲國林東縣)に於てこれを發見した。柄は象牙(支那尺の約一尺)毛は馬の尾毛からなり、毛は久しく使用したものと見え餘程脱落して居る。道は近代の瓦・陶片、古錢と共に残存して居たのであつた。これに據つて考察すると契丹人の間に既に鬚子が用いられて居たことは明かである。これが如何なる理由で宗教上葬式に使用されて居るのであるか。今日では未だ何とも、判断は出来ない。唯だ茲に參考としてこれを記し、その研究は今後に進めることとするが、或は死者の使用遺品であらうか。

(三) 支那土耳其斯坦及び露西亞土耳其斯坦住民が、現今穿袍で斯くの如き裾を含はして居るのは、スタイン、スウェンヘデキンを始め、その他の同地方探検旅行記に多く見る所であつて、茲に示すまでもないが、唯だ參考として以上にキルギズ人の圖譜 O. Schnöder: Schnöder's Typen-Atlas 中トルコ民族たる キルギズ人 (Kirghiz) の圖を引用した。

(四) 以上引用した西蔵人の圖は G. Bonavalot: Across Tibet 1891 第二期八二頁中の挿繪である。この西蔵人は、兩手の挿指を立て、舌を長く出した所で、即ち敬等の挨拶する様である。西蔵人着用の衣服が幾許少年のそれと類似するを見よ。

(二)

契丹着用品にC式があることは、既に私の論文中記した所であるが、その際このC式に就て、私は左の如く附記した。

然るに茲にC式もある。これは千山站附近から畫像石彫刻のキリスト降誕に際し、三人の賢者がその馬小舎に訪問する場面で、小舎の前に在る彼等三人の中、向て左側に立てる一人の人物は、窄袍の肩邊に短い肩掛様のものを付けて居る(拙著 Sculptured Stone Tombs of the Liao Dynasty 第三十一圖・第三十二圖參照) この風は景教教師などのそれを取つたのであらうか。斯くの如き肩掛は宋代佛教の菩薩像(女として



契丹人C式衣服

の)などにも見る所である。この肩掛は、中央亞細亞で、波斯式翼の附いた冠をかぶる人物の衣服に見られ、これが和闐

ムルツク等の描畫の風俗に存在する。這はイラン的のものであらう。このC式は唯だ一個見たのみである。

今茲に、比較としてトルファン ムルツク(Murug)壁畫に描かれた肩掛をして居る人物の圖を示して見よう。(11) 壁畫は三人合掌して居る所であるが、私はそのうち中央の一人を茲に示すこととした。この人物は左右翼の附いた冠を頭に戴き身には肩掛を被つ



畫壁クツルム

て居る。ルコツクやグリユンウエーデルはこの冠の左右に翼が附して居るのは、波斯特有のものであるから、這は波斯翼冠(Mitte persischer Flügelhut oder Helm)であらうと云はれ、そし

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

てこの壁畫の年代は蓋し第九世紀であらうかと附言せられた。この描かれた人物はその容貌より見ると女性(♀)のやうに思はれる。斯くの如き肩掛を着用し、而かも翼の附いた冠を戴いた男性の人物はスタインの和闐で發見した木板面の描畫にもある。(12) これは肩の濃い鬚の多く生えたイラン(Hitt)タイプの男が膝を組んで座して肩掛衣を着して居る。この男は王者らしいが四手を有し、その前の左手に酒盃を持つて居る。そこで私はこれは彼の Banquet of the Sassanian King の變種であらうかと思はれるのであつて、この圖に對し、私は既に前の論文に於て左の如く記して置いた。

中央亞細亞に於いてこの圖様と全く同一のものは未だ發見せられて居ないが彼のスタインが和闐で發見した木板の描圖に一人の王らしき者(四手あり)が胡座して手に盃を持つて居るのがある。這は或菩薩かと思はれるが、革帯に小刀子を附け、その有鬚や冠物から見て、決して菩薩でなく、王者らしく、そしてその圖様から見て、サッサン王酒盛の場面の圖様の一つであらうと思はれる。

この木板繪(これとともに同じ大さで佛教の明王儼らしい物が尙ほ一つ發見せられて居る)はスタインが和闐の Dandan-tilla の住居址から發見したので、這は肩掛衣服として、最もよい代表

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て
 的のものである。そしてこれはトルファン(Turfan)のムルック壁畫人物の
 衣服と同じC式に屬する。



和國木面畫

以上によつて考察すると、このC式衣服はもと波斯式(Persian style)であつて、中央亞細亞を經過して契丹人の間に流行したのであらうか、そしてこれを契丹に傳えたものは、イラン人か或は突厥、回鶻等のトルコ民族であらう。

尙ほ茲にC式の參考として比較すべきものがある。これはルコッタの所謂 Christian fresco と稱する下の圖であつて、即ち景教 Nestorian の靈父が、復活祭前主日(Palm Sunday?)に三人の

男女の信者に向て祈禱祝福する場面である。^(四)靈父は肩掛の衣服で、右手に洋盃を捧げ、左手に掲げ香爐を持ち、香爐の中から香烟が立ち昇つて居る。これに對し三人の男女は整列し手に各々一本の葉の附いた木枝を持つ。這是俗に云ふ枝の日の祭式を示したものである。



トフルンニア靈畫香爐靈父

この靈父の肩から掛けて居る肩掛は、またC式と見ることが出来る。而かも千山站畫像石人物は、景教に於けるキリスト降誕の場面に屬するから、これと何だか關係があるやうにも思はれるのである。

兎に角、契丹のC式は、イランのそれであつて、これと互に關係を有するものたるは、明かのやうである。

(一)茲に示した圖は、滿洲國遼寧縣千山站附近發見の靈像石人物せられた三人の

畫者がエリサレムに於けるキリスト降誕を馬小舎の前に觀する場面で、その三人中の一人である。この畫像石に就て、私は「日本考古學雜誌」第二十七卷第二號の「畫教に關する畫像石」と題し記し、尙ほ拙著 *Sculptured Stone Tombs of Hiao Dynasty* 五八—六一頁及び第三二圖版・第三三圖版にこれを示して置きた。参照ありた。

(二) A. Grunwedel: *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin 1912, 三〇八頁第六一八圖(高と四三總)及び A. von Le Coq: *Bildatlas zur Kunst und Kulturgeschichte Mittel-Asiens*, Berlin, 1925 五頁三八圖。

(三) A. Stein: *Ancient Khotan*, 1907 第一冊第九章第六項・第八項及び同第三冊六一圖版参照。スタインはこの人物と第六〇圖版の人物を以て西藏佛敎、即ち喇嘛敎の圖像の起原と關係あるものと假想し、勿論印度佛敎のそれである事は云ふまでもないが、假令は茲に示せる第六一圖の如きは頭髪多く眉太く、髮濃く、その容貌はイラン人即ち波斯型であるのみならず、その頭に戴く冠は左右に翼の附いた波斯帝王のもの等々から、これは漢菩薩として、印度佛敎に波斯圖像が混合したもので、Perso-Buddhist Art の作品と稱すべきであらうと記されて居る。スタインのこの考證は私も同意であつて、この印度—波斯の混合式は、古くより北方印度から延いて中央亞細亞に及んで居るのである。中央亞細亞に於ては既に彼の *Perso-Indian Art* 像と混化し、所謂「ペルシヤ觀音」すら出来て居るのである。(Le Coq 及び A. Foucher 註 4)

(四) Le Coq: *Chotscho*, Berlin, 1913, 第七圖版、及び Le Coq: *Buried Treasures of Chinese Turkestan*, London, 1928, 五六頁—六三頁。羽田博士はその「西域文明史概論」の「西域に於ける宗教」の中にこの圖

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

を出し(四二頁)これに對して「或は洗禮でも興へた光景であらうかと思はれ」と記るされたが同書の終「補正三則」の條「一九八一—一九九」に「そこで、この圖をパームサンデーの光景を現はした基督教美術の名蹟として紹介して置く」と附記せられた。

(四)

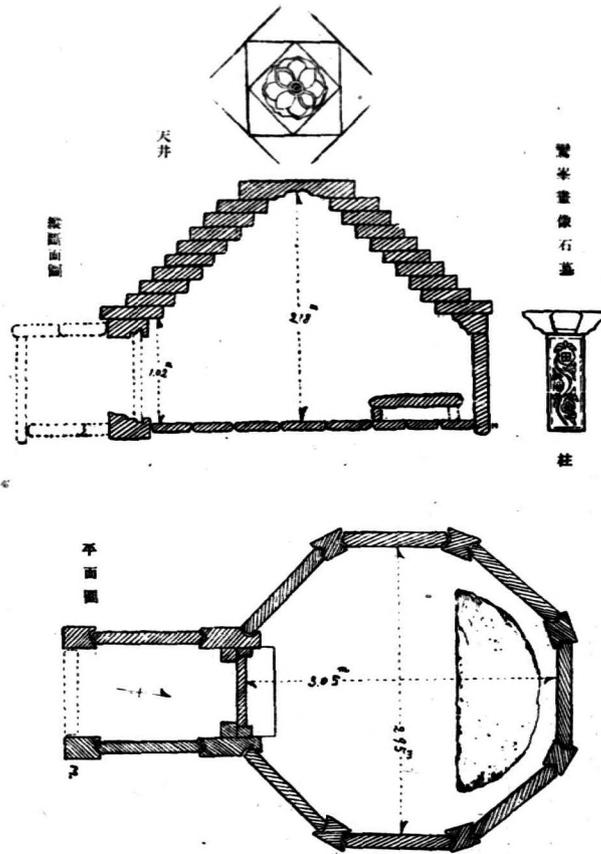
私は以上の如く、契丹と中央亞細亞との服飾の類似に就て、記して來たが、茲に最後にその相互に於ける建築の類似する所を一つ記して見た。

これまで引用した資料は、主として契丹墓内に描かれた、また彫られた畫像であるから、茲にはその墓の構造に就て、一例として擧げて見よう。契丹の墓は、現今殘存して居るものは、大別すると、石造と磚造の二種であるが、石造の中に、即ち畫像石の墓があり、磚造の中に、即ち筆で描いた壁畫の墓がある。

畫像石は個々別々に存在して居るけれども、もとは畫像石墓内の石壁面(或は柱にも)に組み入れられてあつたのである。その墓として今日完全に殘つて居るのは、滿洲國遼陽縣隆昌村(もとハ隆昌州村)の西方十二里弱(支那里)、鸞峯と云ふ鸞鳥の翼を延張して居る様な小山の中腹の土中に設けられて居る、その墓形は次の圖の如くである。(IXIII)

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

八



この畫像石墓は、即ち綠泥片岩系の石片から組み立てられ、室内は美道と玄室の二部より成り、その兩所の間に門があり、それに二枚の扉が嵌め込まれて居る。美道は長方形（兩壁に人物彫刻あり）、玄室は八角形でその柱と壁には各々人物や牡丹花、孔

て、中央亞細亞各地の事實を各書から多く集めてペリオと同じ意見（六）を述べ、この事を精記して居り、更にこの天井の組立の起原は、もと彼のアルメニア木材組送り天井（"Isterner" dach aus Bark instakmen, modern Armenien）のやうなものから來て居るであら

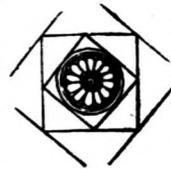
雀、山羊などが彫られて居る。そして玄室は壁上から九重の組送り天井が組み上げられ、その頂上に一枚の蓋石を置き、これに花一輪を彫て、下から見えるやうにして居る。

以上の畫像石墓の組送り天井の構造は、中央亞細亞の古代洞窟内の構造にも認められ、這は同地方旅行者の當に見る所である。彼のペリオは（四）schanの Qyzi 千佛洞に就て「此處の洞窟内の構造は、支那式でなく、印度の Gandhara 式であつて、（五）その著しきは天井の組送り天井の如きがこれである云々」と云はれて居る位である。ルコックもその著書に、この式の構造に就

うと云はれる。(七) 左に参考として、中央亞細亞とガンダラの例を示して見よう。



井天り送組の院寺ルジキ



井天の院寺ラダンガ度印

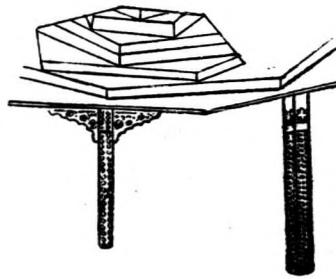
中央亞細亞に於ける洞窟内の組み送り天井には、彩色裝飾が施され最頂の所には花形の紋様などを以てし、これに鉤掛を附け、それに燈明皿を吊るすやうになつ居る。さればこれを、*Laternen-Decke* と稱する。

以上の比較對照によつて、契丹畫像石墓玄室の組送り天井は中央亞細亞のそれと同じであり、その最頂天井裏の花一輪を刻するは、是れ此處から燈明皿を吊るした形の痕跡ではなからうか。そして契丹に於けるこの構造の原形は、もと北方民族の *Tent* 形から來たものでなく、中央亞細亞から遠時代突厥或は回鶻人によつて、この構造を知つたやうに思はれるのである。然らざれば斯くの如き複雑なる天井の構造は、*Tent* 生活者には思ひ附かぬ所

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

であらう。

中央亞細亞では、組送り天井は、天井の頂上が、蓋が無く、明け放しになつて居るものもある。これは室内に明を入れるために殊更に斯くせられるのである。この種の建築は古代の遺蹟でなく、現今これを築造して居るので、左に圖する家屋がこれである。(八) この家屋はヒンドークツシユ (*Hindu-Kush*) のミラグラム (*Miragram*) 地方居住ラバイツラ汗 (*Obaidullah Khan*) の居室である。スタイ



室居の族貴ユシツクドソビ

ンはこれを特別に *Ceiling with Sky-light of Characteristic Construction* と呼ぶ。向ほ斯くの如き組送り天井は、パミル (*Pamir*) 地方では竈の上にも設けられて居る。(九) 則ち天井は組送りとなり、これを支えて居る柱に裝飾彫を施し、その柱冠の

形状は、滿洲鷲峯の畫像石墓の柱とよく類似するのを見よ。

以上の如き組送り天井が、今尙ほ中央亞細亞貴族の居室或は竈の天井等に築造せられて居るのは、極めて興味がある。これによつて考察すると、斯くの如き組送り天井は、昔は一般中央亞細

再び契丹と中央亞細亞服飾と建築の類似に就て

亞上流社會に於て、住家として築造して居て、これが廟や墓にもまた行はれて居たと見て差支なからう。

新く記して來ると、畫像石墓の玄室内の組送り式天井も、その起原は、またヒンドークラッシュ地方等に今日行はるが如き建築から來て居るものと思はれる。そしてこの組送り天井には、頂點の開いて明を入れたものと、頂點が閉されて、此處から燈明皿の吊るされたものとの二種があつたことが推知せられる。そして畫像石の場合、その後者に屬する。

(一)契丹の墓は石造としては、畫像石墓の如き羨道・玄室を有するものあり、その他石室(Dolmen 型)ノ箱形や Tumulus, Cairn 等がある。塚墓は簡單なるものもあるけれども、多くは羨道・玄室を有するものが普通で、皇帝陵の如きは、これの内部は連續多室を有し複雑になつて居る。

(二)畫像石墓に就ては、私は三回調査を行つた。拙著「遼代畫像石墓 Sculptured Stone Tombs of the Liao Dynasty, 1943」及び拙著「滿蒙を再び探る 1928」を参照ありたい。

(三)私は畫像石のそれと同一形状の畫像石墓を遼陽縣鞍山市滿鐵苗圃内で大正三年民國三年 1914 發掘した。これに就て時報告として拙著「西比利亞から滿蒙」(1928)と英文「遼代の畫像石墓」のうちに書いて置いたから参照ありたい。

(E)P. Pelliot : L'art bouddhique du Turkestan oriental, La mission Pelliot 1910. 羽田亨博士「西域文明史概論」中ペリョットの意見を引用されて居る。

(五)印度サマッタラ寺院の組送り天井は、主として(A. Foucher : L'art greco-bouddhique du Gandhara, 1905, p. 145)からとられた。即ち茲に示す圖がこれである。

(六)「タムナック」は、ヤコブ La Coq: Hildorfstatue zur Kunst und Kulturgeschichte

schichte Mittel-Asiens, 1925, の九九頁—一〇七頁に於て、中央亞細亞畫像石天井に就て第二三〇圖から第二五五圖を出してよく説明して居る。餘かに参照すべきものである。

(七)「タムナック」はこの比較圖を Perrot u. Chipiez: Art in Chaldaea and Assyria, 1884 から取られた。

(八)「タムナック」はオーストラリアの家に宿せられ、これを見られたのであつて、A. Stein: Serindia, 1921, 第一冊四八頁及び Ruins of Desert Cathay, 1912, 第一冊四八頁に圖記して居る。

(九)この畫の天井は、ハミル地方 Namatgut 村 Kadi の家で見られたもので、Ohlsen: Through the unknown Pamir, 4-6, 1904

尙ほ參考までに記して置きたいのは、遼代陵墓西陵(道宗陵)の如きは、組送り天井でなく、圓錐形であるが、その頂點には下に向て花紋様を刻した石を置いてあつた(今は他に取り去ら、た)。尙ほ東陵(興宗陵)の天井は敦煌(Tun-huang)千佛洞の洞窟内部の構造とよく似てゐる。これに就て La Coq が(六)の著書中圖示した第二三三圖第二五五圖等によく類似し、而かもその彩色紋様、繪畫の描かれ極彩色の有様がよく似て居る。遼の興宗陵は壁畫はよく保存せられ、道宗陵にもその痕跡があり、興宗陵もとはあつたであらう。この事は、つづれ他日記すであらう。尙ほ P. Pelliot : Les Grottes de Touen houang, の第三冊第四冊を参照ありたい。

(一)東京東方文化學院出版、拙著「考古學上より見たる遼の文化」第二冊・第三冊・第四冊、「圖譜」昭和六年九月十日「遼代の壁畫に就て」再び圖譜を載べて、「遼の文化を再び探る」を参照ありたい。

說吐火羅語

伯希和 (P. Pelliot) 撰
馮承鈞 譯

是國譯文彙編第一九三六年刊二五九至二八四頁。二十九年春金會場集其
他研究吐火羅語論文，合爲一冊，題曰吐火羅語考，寄給中華教育文化基
金會。遲至今日，尙未出版，恐已散佚。近年九門諸子，常以此類參考論
文太少，而同時中央亞細亞雜誌稿甚急，姑以手編應之。重校一遍，其
間儘可決言義未檢對者，然敢自僭譯少大致或不謬也。三十二年十二月
一日譯者識。

吐火羅語 (Tokharisch) 問題是一種必須深知中亞歷史始能解答
的問題，可也是一種最難解答的問題，因爲就現在我們的知識程度
說，有些解答互相抵觸，好像任何解答皆可包括在內。要使問題明
瞭，祇能作陸續接近的研究，各人利用前人研究的成績，整理自己
的主張，而爲一種暫時學說，然而仍舊未能掩蓋其弱點。

我在亞細亞報一九三四年一月至三月刊二三至一〇六頁一篇題
作吐火羅語與庫車語的論文中，就是作的這種嘗試。我在此文末尾
曾說：「總之，我以爲有兩點我是腳踏實地的：那些回紇題識中的
吐火羅語 (Tokharisch)，應是玄奘在吐火羅地方 (Tokharistan) 所識的
現代吐火羅語，而同一題識中的苦先 (Kusan) 語，就是龜茲語，即
庫車語。」現在貝烈 (H. W. Bailey) 君對於同一問題曾在東方研究

學校校刊第八卷八八三至九一七頁中，發表一篇題爲 *Taukasta* 的
論文，與我上述的兩種結論相合；他也主張必須就七世紀至九世紀
時代間研究此項問題，不可引證紀元初年的希臘語或拉丁語文件；
他的研究頗多新穎而重要的見解；可是有若干例，我似乎不能不提
出異議。

我固然明說回紇題識中的吐火羅語，即是七世紀吐火羅地方的
語言文字，然而我乃是繼 F. W. K. Müller 與 Steg and Steing 等之
後，假定此吐火羅語即是 Leumann 氏之「第一種語言之甲種方言
(*Taraghe I. dialecte A*)」。我曾自問玄奘所記觀貨邏 (吐火羅) 的
文字，是否能與此種考訂相符，我曾說過或者無有不能排除的困難
。我們不應忘者，二十幾年來語言學家所言的吐火羅語，就是
第一種語言中之甲種方言 (有時包括乙種方言 *dialecte B*)。貝烈
君以爲我的退讓頗可惋惜。他的意見以爲吐火羅文字就是大夏
(*Bactria*) 所用約古希臘文字；而第一種語言之甲種方言，乃是哈喇
沙爾 (*Qarashan*) 的土語，與吐火羅語毫無關係。或者他有理由。但

是他未將此理闡明。他的考證有一種強有力的根據：玄奘曾說吐火羅字源二十五言，顧考希臘文有二十四字母，而在大夏又加了一個代表 sh 的符號。相傳鸞噠 (Heephthalites) 人的貨幣，尚用此種文字。最後 Von Le Coq 從吐魯番攜回的一篇殘卷，據說其中文字是一種現在無人認識的古代閃種 (Semitique) 文字，但是 Junker 君說希臘文字，如此看來，大夏的希臘字母曾為一種語言的媒介，而此語言似乎就是回紇題識中的吐火羅語。所可異者，我們在吐魯番發現不少第一種語言之甲乙兩種方言的寫本，僅此殘卷用希臘字母，而此希臘字母就是題識所云吐魯番最初回紇譯人所用的字母，難道說此字母就是當時所用的唯一印度歐羅巴語言的字母麼。尤可異者，吐魯番的回紇人用遠處的吐火羅地方語言來翻譯彌勒下生經 (Maitreyasanti)，而將他們四圍所用的第一種語言甲種方言廢置不用。貝烈君別的論證無大價值，例如他以為龜茲同阿者尼 (Aeri 即哈喇沙爾) 既然久為兩箇獨立國家，不能共有一種語言；要知道日耳曼人的瑞士，同日耳曼分離了有好幾百年，並未因此不用日耳曼語。則未經審查所謂「希臘文字」吐魯番殘卷以前，不應遽作定讞；審查以後，始能說所寫者為何種語言，而此種語言是否在回紇人所譯吐火羅語中留有痕跡。

貝烈君研究吐火羅人同吐火羅語名稱的沿革，曾引證 Taugara

一字，並以此字為論文標題，誠有理由，蓋此字曾見 W. Thomas and Stein Konow 二君所刊布的一種敦煌塞語 (Saka) 文件著錄。將此文件與斯坦因 (Stein) 的一種寫本比對，好像此 Taugara 不在吐火羅本地，如 Clauson 君前考之說，而在甘肅，由是與希臘文的 Tharourtoi 同 Tharourouros，以及 Maes Trianus 行程中的 Thoghara 城等名稱有相連之關係。案 Thoghara 城有時被考訂是甘州，可是 Taugara 同甘州 (Kannuca) 在塞語文件中並見著錄，未曾相混。對於吐火羅名稱沿革之一切研究，必須注意此種成分，設若貝烈君之考證可以證實，其事誠然重要，因為可以證明等若吐火羅的 Taugara 名稱晚在九世紀時，尚存在於甘肅也。註一

註一 然我對於貝烈君 (八八五至八八六頁) 所主張大月氏音讀之說，未能信其不誤，其說以為大月氏之氏應讀若「是」，大月乃吐火羅之譯名，氏猶言氏族；蓋若大月支之支，猶言支派。然我以為支氏二字互用，純屬音讀的關係(尚有氏字的寫法；又一方面似似可教名稱國氏，還有高提的寫法)；氏(音支)字應在譯寫外國名稱諸字之列。貝烈君以為大月氏之所以音譯為月氏者，猶之大宛 (Bukhara) 之音譯為宛；大月氏之外有小月氏，亦猶之大宛之外有小宛。此類例子，我們亦知有之。阿剌槃人之稱大食，應是 Hara, Balabiz 之對音，但是晚見的載籍曾發明有一小食。然而大宛絕不失為大宛，尤其是大月氏絕不失為大月氏。華人始終傳說大秦之大為大小之六。大夏之大原亦譯作大小之六，後來因與吐火羅讀音彷彿相近，遂一體而為譯名。

貝烈君在八八七至八九〇頁研究吐火羅名稱流傳至今的種種寫

法。討論此名稱以前，我應對於貝烈君偶然引證的別一名稱作一種簡單的討論，這箇名稱就是 *Chrw'n* 名稱，而經他還原爲 *Thruwan* 或 *Dhuwan* 者，以此名與希臘語之 *Throana* 共比附，並註釋云：「伯希和在吐火羅語與庫車語三頁譯寫的 *darvan* 當然不能承認。」其實我從來未作此種還原。在他所指那一段中，我僅將烈維 (*S. Levi*) 之論證轉錄，烈維以敦煌等如 *Drw'n*，又等如 *Throana*。我引證其說者，蓋別有目的，我並在當時特別聲明暫不討論此敦煌問題。然而我現在甚願在此處討論。貝烈君在八九三頁說：「此 *Throana* 城名，察利語 (*Sogdien*) 寫作 *Dhrw'n Dhrw'n*，表面皆有一種摩擦音 (*Throana* 之 *th* 同察利語之 *th* 皆不能有 *t* 或 *c* 的讀法……中國語名作敦煌與屯皇)。

我們讀敦煌之教爲墩者，因爲現在本地同北京官話皆作如是讀；可是古音讀作屯；如此看來，華語讀法並不將 *t* 與 *c* 互用，而我們原則上應該期待其他譯名有一濁音發聲；雖然有希臘語的 *Throana*，乃貝烈君仍主張察利語之 *dhrw'n* 有還原作 *thruwan* 或 *dhuwan* 之可能。然而此種發聲誠必須要摩擦音麼？我不相信。這件問題不是察利語或希臘語所能解決的。察利語曾用 *dh* 發聲譯寫土語之 *dh*。至若希臘語，好像 *Mas Titanus* 的人員不能用本地語言同土人直接講話，必須用譯人居間。斯坦因發現的察利語文字既

然證明當時作中亞大媒介的是察利人，好像中國西部之希臘語名稱，在當時已夾雜有察利語讀音在內。*Throana* 之情形得如此，*Thaghouri* 或 *Thehara* 之情形也是一樣，塞語既作 *Tangara*，而吐火羅本名在任何譯寫中，就是希臘語的譯寫，皆未表示有一摩擦音在內。至若察利語的譯名，假擬有一類流音發聲如 *dhuwan* (*dh* = *Duwan*) 者是，漢名勿專還原作 *Duwan*；總之，我們未能確知甘肅西部在當時究用何種語言以前，任作何種選擇皆是勞而無功的。

關於吐火羅名稱的材料較夥，然貝烈君在此處所註音讀有誤。我曾將各種寫法正確臚列；可是他將吐呼羅同吐豁羅之讀音皆寫作 *t' uokhuata*，其實應將前一名寫作 *t' uokhuata*，後一名寫作 *T' uo-kuata*。當貝烈君討論第二字的音讀時，就可見其錯誤之重要了。所有漢文譯名對於此第二字所用的字（除開梵文的 *Tukhara* 外）皆假擬有一清音聲母，^{註二} 接着有一層音韻母或半韻母。據貝烈君說：「漢語寫法用 *khua* 而有唇音 *n* 者，未見他書著錄；西利亞語作 *dhvren* 見後。」後頁果然說，西利亞文 *dhvren* 名稱中之地位，或者「本於察利語晚代文件中用 *n* 字母之傾向。察利語之 *dhwkh-* *dhghwt-* 乃 *dhukht-* 或 *dhmghd-* 之轉變，中世紀波斯語作 *dhakt*，此言女」；並附註云，我在論文四八頁註一對於西利

亞語的寫法是「不能承認的」。我在此處也是維持前說。貝烈君所引體字母易位諸例很有關係，我並承認他（八九四頁）用 *gōrā* 解說象利語之 *gōrā* 等字母易位之例，發前人所未發。可是他說的西利亞語之「傾向」究竟作何解釋？他是說西利亞語純粹仿象利語的寫法嗎？就西利亞語言，其事有可能，然與漢文譯名毫無關係，因為漢文譯名是譯音，而不是寫字。我們既在紀元五百年左右見有漢文譯名吐火羅，其第二譯字中應含有一箇唇音韻母；象利語與西利亞語同漢名皆錄有此音，我不知「不能承認」之理何在。

註二 貝烈君引摩尼教經考，說貨 (*khau*) 字音韻兩用，因為此字在 *Farghana* 譯名中譯寫 *sha* 音。其實在此考中，誤貨 (*sha*) 作貨 (*khau*)；蓋此字在 *Farghana* 同莫賀 (*Daqha*) 等譯名中皆作貨也。這條二十年前的書註數使貝烈君發生誤會，我很惋惜；可是漢文吐火羅的譯名中假擬的對音皆是 *-ka-* 而非 *-shi-*。

第一種語言之甲種方言既不成爲「吐火羅語」應該給他再定一箇名稱。Sieg 君假定的 *arya* 語不能成立；貝烈君以爲此字從梵文雅語之 *arya* 轉爲梵文俗語之 *arya*，終在第一種語言中變成此種寫法，此說甚是。貝烈君以爲第一種語言之甲種方言特爲流行哈喇沙爾一帶之語言，於是主張卽以此地的地名爲語言名。而他承認烈難已經建議的「哈喇沙爾語」，因爲此突厥波斯名稱太近代了，乃採用阿普尼 (*Apni*) 名稱，所以在他彙篇論文中，概稱第一種

語言之甲種方言曰阿普尼語 (*Apni*)。

此種語言縱然是哈喇沙爾的古語，這箇「阿普尼語」的名稱並不能使我滿意。我們不知道哈喇沙古名之真正本地語言寫法。Kasson 在一〇七六年編的突厥辭典臚列的名稱尙富，當時庫車吐魯番西域之間僅著錄有一不重要的地方不古爾 (*Shir*)，並無指示哈喇沙爾的名稱，或者其地 (同古國) 在當時已經很荒廢了。中世紀末年，此地突厥語的名稱是 *Chir*，降至近代始以哈喇沙爾代之。但有一事是確定無疑的：阿普尼不是一種土名，而是一種梵化名稱，業經若干梵文文件，一種塞語文件同玄奘記傳所證明。阿克蘇 (*Aksu*) 梵名跋祿迦 (*Bharuka*)，羅布 (*Lop*) 梵名是納縛波 (*Navapa*)，難道說此兩地的語言應該名曰跋祿迦語同納縛波語麼？

至若土名，貝烈君根據呂岱司 (*Lidice*) 君之說，在八九八頁臚舉各種漢譯名稱，首列烏耆一名，謂其原文是 *Okri*，而此字爲 *ok* 轉出之形容詞，註三龜茲語相對之字爲 *okri*，此言蛇，與哈喇沙爾國王的「龍」姓不無關係 (八九九頁一六頁)。這些推想全要放棄，因爲烏耆名稱從未存在。可是負擔此種錯誤的是若干中國版本，而不是貝烈君。現在問題應該這樣提出。

註三 但是任何土名的譯名皆未表示有一 *-i* 音。註的結尾則 *Apni* 乃是一種梵化名稱。

中國史籍著錄之國大致可當現在哈喇沙爾一帶者，漢以來即名焉者。可是玄奘在七世紀時，寫此國名作阿耨尼，Skandias Julien 早已想到此是 Agni 之對音；呂佶司君首先在若干文件中發現的，就是這箇梵化名稱 Agni。其四從前哇特斯 (Waters) 曾謂焉耆是突厥語 *ranhi* (應作 *yanhin*) 之對音，謂此字猶言「火」，與梵文 Agni 之訓義恰合；可是 *yanhin* 乃是近代轉思滿語 (Osmani) 的寫法，猶言「火災」，而哇特斯的「突厥」說，自從我們認識紀元初數百年塔里木河北語言具有印度歐羅巴語言性質以來，主要論點已被推翻了，況且他已將從前所主張的阿克蘇古名，用 *Orni = Baluka* 來比附一說，自行放棄歟 (參看通報一九三三年刊一三八頁)。呂佶司君當然不採其說，而承認焉耆應與阿耨尼有相連之關係；審查其他譯名以後，他的結論 (三三頁) 說：「阿耨尼國似在任何時代有一印度名稱。」說到這裏，我的見解與他不同。

註四 呂佶司君 *Waters' Heritage* 見普魯士科學研究院記錄，語言歷史門，五至六四頁。

呂佶司君所列舉哈喇沙爾古名之其他譯名有僊尼，有烏耆，有僊夷。

僊尼名稱在五六年翻譯之月藏經列舉諸國名錄中凡三見。

註五 烈維在一九〇五年曾研究過此類名錄，對於此名未加考訂。可

說吐火羅語

是呂佶司君根據列舉的次序，以為此名就是焉耆或阿耨尼之同名異譯，此說我完全贊同；在此佛經中用一箇梵化的譯名亦無足異。

註五 參看東法蘭西學校校刊第五卷，二六一頁，二六三頁，二六七頁，二八四頁。

烈維曾說此經是天統四年所出，而合此年為西曆五六六年；案天統四年應合五六八年，可是詳細審查一遍，原文實作天統二年，則「四」字應是排印之誤。(Bogoh 釋考二七〇頁排印之年號亦誤)。第二頁之譯名寫作僊尼，與是東京編本排印之誤；好在僊僊二字讀音極相，無甚關係。

中國史書從漢書起，皆寫此國名作焉耆，獨有釋藏經文當作烏耆。除開哇特斯 (玄奘行傳第一冊四六頁) 同沙碗 (通報一九〇五年刊五六五頁) 所引之烏耆外，玄奘法師傳附註說阿耨尼舊曰烏耆 (烏亦作屬)，而同一註釋並見西域記阿耨尼國名下，(參看日本京都大學校勘本附註之異文) 如此看來，好像有兩種不同的譯名，一曰焉耆，一曰烏耆，我從前經過猶豫之後，亦採哇特斯之說 (遠東法蘭西學校校刊第五卷四三七頁)。註六 現在我的見解有異，然在說明以前，我想討論法顯傳所著錄與烏耆名稱寓有關係之烏夷或僊夷。註七

註六 我曾據哇特斯說，引有僊夷一名，可是未見釋藏經文著錄有之；備在後引可洪音義中有此寫法。

註七 「僊」字不見於字書，我暫取烏字音讀。

首先考訂法顯之烏夷為焉耆 (哈喇沙爾) 者是哇特斯, *Lodovico* (法顯行傳十四頁) 從哇特斯說，而沙碗 (上引通報五六四頁) 亦主張是哈喇沙爾。烈維在亞細亞報一九一三年刊第二冊三四一頁以為若將烏夷

考訂在龜茲(庫車)，法顯行程似易了解，職是之故，呂僞司君(三二頁)猶豫不決。蓋在當時烈維未見釋氏西域記有一段說塔里木河流經屈茨(庫車)偽夷禪善等國注入牢蘭海(羅布淖爾)，可並參看水經注所引此記之文，與沙畹在通報一九〇五年刊五六四頁轉錄之文。偽夷屈茨既然並列，則不能說偽夷即是庫車，而焉耆國即在庫車禪善二國之間也。如此看來，我以為偽夷應對焉耆，毫無疑義。

哇特斯(中國雜誌第八卷二二五頁)曾說偽字不見於任何字書；在表面看來，此說不一定全對。此字首見水經注引法顯傳著錄(參看通雅一九〇五年刊五六四頁)，而前引釋氏西域記之文在水經注引文中似亦作偽；可是後此將說明此兩段中之偽字蓋為校勘的結果。最可注意者，歷來註釋音義的人，從來未將此世人未識之字註釋出來。烈維曾說慧琳所註法顯傳的音義(爲字彙第十册一〇三頁)祇有焉夷，並無烏夷或偽夷；可以音義證之，上一字「譌乾反，前西域記已說」。如此看來慧琳在八一七年所見之法顯傳實作焉夷；在九四〇年可洪所註法顯傳音義亦同(爲字彙第五册三二頁)；「偽夷。註八上於建反。正作偽，亦作耶。」又云：「偽夷。上於建反。亦作偽，註九耶於憶反。偽註十疑爲假之誤。川音註十一作陽，音鳩；應誤，或作隔」。

註八 證以下註音義，偽字應改；案可洪音義僅見東京繪本轉錄高麗大藏本，高

麗本每字位不如世人所擬之古。

註九 東京繪本此字亦作偽；好像可洪祇有一字作偽。

註十 此處偽字同註八之偽字，疑皆非可洪原文。

註十一 「川音」未詳。康照字典仙道常引有川音。雖未詳爲何音，好像或當讀在可洪以後。

如前所引，可洪著錄之名雖異，然亦承認法顯傳中祇有偽夷；雖見有作隔夷者，然指正其誤。

慧琳註法顯傳音義時，曾說「前西域記已說」。今檢所註西域記文(爲字彙第十册四六頁)，果有下說：

「阿耆尼國，兩嶺之西第一國也。昔音祇。古曰嬰夷，註十二

或曰烏夷，或曰夷者……」。註十三

註十二 此名未詳出處(鈞案疑爲焉夷之誤)。

註十三 下文與焉耆名稱無關。

此註之特點立時可見。不但不見焉耆之正式的同音用的名稱，而且不見慧琳在法顯傳音註中所言別見於西域記音註中之焉夷。總之，任何載籍皆未將烏耆同焉耆兩名並列。這種遺漏似乎太奇。我以為祇有一種解答，就是說烏耆名稱從未存在，烏夷亦然，而一切釋藏經文著錄此類名稱者，好像是有人故意改竄；而一切古籍或作焉耆，或作焉夷也。

法顯傳烏夷之例比較明瞭。除開可洪指摘前人隔夷之誤外，慧

琳在八一七年，可洪在九四〇年，祇知有一焉夷。况且在此二音義所錄之異文中，尙不知有宋藏明藏諸本之偽夷，亦不知有高麗藏之烏夷。其實偽夷僅兩見於水經注，一見所引之法顯傳，一見所引之釋氏西域記。沙畹所見水經注本，是一七五四年趙一清校釋本，蓋爲曾經校勘之文。水經注所引法顯傳，寫其名作烏帝，與明藏同；明末有一校勘家曾言法顯原文作偽夷，於是趙一清據以校改（參看王先謙本三卷七頁）。這種校改，對於水經注原文當然沒有價值，而對於法顯傳原文亦然，因爲他所採的法顯傳是尋常流通的明藏本；我們承認烏帝是烏夷之誤，然而不能說六世紀初年瞿道元撰的水經注就是這樣的寫法。至若釋氏西域記引文中之偽夷，蓋爲趙一清根據明藏本校改之結果；可是一切舊本水經注皆作烏夷（參看王先謙本二卷十頁）。但是唐人所見的法顯傳既寫作烏夷，我們並應承認水經注引的法顯傳同釋氏西域記原文是烏夷，唐以後的校勘家受了唐末烏夷訛寫的影響，遂將原文改成烏夷。

法顯傳原文必是焉夷，而非烏夷，可以宋藏明藏諸本中之偽夷作間接之證明。偽字不見字書，任何音義皆未註釋其音，玄應慧琳可洪諸編皆然。註十四九七年行均之龍龜手鏡亦未收有此字。若說是法顯特別創此字或者古寫本採用此字，似乎不類真相。然有偽字存焉，這就是可洪所見之字，則偽夷爲焉夷之誤，烏夷爲焉夷之誤

，烏者爲焉者之誤，似無可疑。

註十四 不可辨偽字同偽字相混，諸字皆以偽字充焉字爲寫，我曾在龜鏡中見有一例（大正大藏本第五四冊一〇二頁）。此外同書尙有一例，佛所行讚卷二有伽蘭（Gāra）山，註云「譯曰偽也」（大正大藏本第五四冊一〇四頁），此係疑爲像之訛，而像又爲象之訛（關於鳥單二字互訛之例，可參看 Anouar-G. F. 說，見遼東法國學校校刊第十二卷第九分六一至六二頁）。世人已知龜鏡語的解釋常爲謬誤的，尤其此版本不佳，最近大正大藏經本並未將無致必須改正之文指出，錯誤固甚即見有之。我疑心同冊一〇二頁之偽字亦爲象之誤。

難者曰，烏夷烏者並皆存在，因爲慧琳已在所註西域記音義中著錄。我的見解却與此說相反，慧琳所註音義並且供給烏夷烏者並未存在之最堅強的論證。慧琳註法顯傳音義，祇知有焉夷，並且有「反切」作保證。且言已詳前註西域記音義。則在所註西域記音義中應該重見焉夷之名，孰知祇見烏夷，不見焉夷，而且慧琳同任何註音義者皆未註此烏字之音。此事很簡單：蓋在若干著錄焉夷或焉者之寫本中，有人誤焉作烏；我們前已說過此種訛誤在十世紀初年發生，無論如何，要在九四〇年以前發生。北宋時代有些「博識的」校勘家，認此訛寫是正寫，於是乎在慧琳音義同其他各本中一概校改了。幸而慧琳同可洪的音義受反切之保障；即因此種偶然，遂使此焉夷古名不致於埋沒。

焉烏兩字容易相混，縱在尋常文字中亦然，其例不難引舉。茲

就釋藏中舉其一例以證之。三世紀之譯經有名義足經（南條自錄第六七四號）者，高麗藏本正寫作「尼焉」，此乃 *Nirvāṇa* 名稱之一種梵文俗語寫法，而宋元明藏諸本皆誤作「尼烏」（東京藏印本卷字卷第五册六一頁）其實六朝唐宋時代的書法皆易使此二字相混。註十五所以尋常流通的釋藏本在西域記阿耨尼條下註云：「舊曰烏耨」，其字確作烏；可是刊行京都大學校勘本的敦煌家遵從善本而在此處採用的字，模糊不明可以讀作焉，也可以讀作烏。

註十五 此種訛誤在近代藏書中尙見有之。馬歡瀛涯勝覽（十五世紀）中有一名 *dhīwān*（馬來語名；參看通雅一九三三年刊四〇一頁）之果實諸書本皆作焉。爾島；祇有最近發現之一鈔本正寫作賭兒焉。

焉音名稱焉烏之混用，尙可用最近一證例之。我在敦煌描繪有一部慧超行記鈔本；慧超在七二五年經行西域；此鈔本疑爲九世紀本，而哈喇沙爾之古名兩見卷末數行。我在敦煌描繪時，曾寫其名爲焉耆，後來羅振玉君藤田豐八君校注之本，以及高楠順次郎君在一九一五年大日本佛教全書中之遊方傳叢書第一册（六十頁）刊布之本，並寫其名作焉耆。可是高楠君在大正新修大藏經第五十一册九七九頁重印的慧超行記中兩名皆作烏耨，而無說明。此名在敦煌遺書（羽田亨的音和合本）中第一字實寫作焉。若據邢澂金石文字辨異（衆學軒叢書本二卷十七頁，又四卷十一頁），或碑別字（一卷十六頁又二卷五頁）或碑

別字補（二卷三頁）考之，足見焉字易誤作烏，我以爲慧超行記中之顯名應作焉耆。如前所述。釋藏不少經文自十世紀以來將焉耆原名說爲烏耨之理，不難索其解也。註十六

註十六 焉耆烏耨混寫，可引之例尙有若干：（一）大正大藏經之僧堂行記（五一册九八〇頁）本文作烏耨者，下註異文件焉耆；（二）玄奘西域記阿耨尼條今本附註作烏耨者，釋迦方志相對之文亦同，然圖書集成所錄西域記文，附註作焉耆；又佛祖統紀（卷三）相對之文於阿耨尼條改西域記原註，而引焉耨耨耨；然在圖治大藏本（致字卷第九册三四頁）佛祖統紀阿耨尼下註云與焉耆名烏耨者，未嘗與焉耨，而大正大藏本（第四九册三一四頁）作漢書名焉耆。

新疆尙有別一古國名，似亦有相類訛寫情形，訛誤發生甚古，然其力量不及前誤。註十七 前漢書（卷九六七）著錄新疆西南有一國，名稱烏耗。顏師古在七世紀上半葉註云：「鄭氏曰：烏耗音顯擊。註十八 師古曰：烏音一加反；註十九 耗音直加反。急言之，聲如顯擊耳，非正音也。」師古所引鄭氏是原註漢書之人，其本已佚，其人乃四世紀時人。註二十 我們所考古音讀，祇能上溯至六世紀，固不能嚴格適用於此時代，可是烏顯二字從來未作同一音讀，反之，顯字之音與焉字之音却很相近。如此看來，我以爲鄭註原本似作焉耗，而非烏耗。此名訛誤恐不止此一字。前漢書寫此國名作烏耗，而後漢書（卷二一）寫同一國名作烏耗。六七六年註僅轉錄顏師古註，惟改耗爲耗，而謂「耗音直加反」。宋代考據家之改竄不僅限於

此也，劉敞（一〇一九至一〇六七）於前漢書烏耗傳註有云：「耗當作耗」，此說顯屬主張。鄭師音註祇能適用於耗字，不能適用於耗字。我敢說六七年註後漢書所見本，應是耗字正寫。否則所引顏師古音註，將無從索解。然在六七年以後，始有人在後漢書中誤耗作耗。自是以後，後書漢之文與所引師古耗字音註始難調和；似有一「聰明」校勘家信任本文較切於註，於是乎改註中之耗為耗；其意固在免去抵牾，可堪變成一種謬誤了。註二一

註十七 新編古地名寫法不明之例尙多；有一個頗著名，我將在別一文中討論之：

即金滿國名界已（參看沙哈西突厥史料三三八頁），此名在漢書中有時寫作金滿（參看沙哈文之研究，見通雅一九〇七年刊一六九至二二五頁）。

註十八 耗字不見於字書，我暫謂若昂；六七年註後漢書的人引顏師古註，改寫作昂，康熙字典（鳥字下）引顏師古註亦作昂；今本前漢書兩見之字，是近代校勘之誤，有其可能。意者昂字既不見於字書，校勘者改作昂，而原昂字疑為傳寫之誤（原文可以令人想到昂字），然則應該假定原文訛誤發生，應在顏註脫稿半畫記費，因為六七年引顏註文時，其字已作昂也；此事誠其有可能（參看費註），然不甚近類相類。

註十九 顏師古所註烏耗音讀，似應讀若烏耗，然未免可疑。鳥字之有烏音，始見於宋代之集韻類篇，一直到康熙字典與韻源，皆引其說；然而皆是對於烏耗兩名之音讀而引證的，則其起點皆非顏師古註。我疑其為顏師古註舊本傳抄之誤，而一加反之加，恐或直加反之所承述。至若鳥字音註中之加字，究為何字，頗難確定；或者是一「如」，或者是一「奴」，或者是一「胡」，總之，必與反切中之「一」合讀，而得音與「鳥」字等聲韻法相同之字，或幾近鳥字等

說吐火羅語

音讀法之字。既主此說，願後漢書（卷一一八）所引顏註亦作一加反，則應承認此說亦非經過一番校改之文，此豈一傳讀的一校改不少見。

註二十 可參看前漢書卷末顏師古敘例。

註二一 漢代烏耗國名理想上的對音好像是 E.P.，若從沙哈之說（遠東法蘭學校校刊第三卷三九八頁，同通雅一九〇七年刊一七五頁），認定就是玄奘西域記中之烏嚧，豈不更加有力；可是 Herman 君反對這種考定（Sven Hedin 南西藏卷八，一九頁，三六頁，四五一頁），而其立論似甚充足；況且烏嚧（uṣṣat）對音即耗（uṣṣa）尙遠。我這原作 uṣṣat 者，蓋從慧琳音註（爲字卷第十册四九頁）；可是耗字或歸字尋常音讀作 SE。應注意者，慧琳註西域記烏嚧之音，下字音讀不誤。可見在所註玄奘傳中（爲字卷第十册五二頁）寫其姓名作烏嚧；案玄奘傳之一切版本，此名皆作烏嚧，與西域記著錄之名同；慧琳在烏嚧下註音云川省反，足證所註者其標字音非無音；好像慧琳在九世紀初年所見本此處有誤。復次慧琳註烏嚧云爲胡語，註烏嚧云爲梵語。當慧琳時代照例稱伊蘭曰胡，謂印度曰梵，分別甚嚴；慧琳聲韻疏勸人，對於新疆那些時常梵語化的名稱，也有鑒於辨別之處，足見其見解不能始終蒙蔽也。

歸結一句話，我以為烏夷烏者同焉夷焉者確未共同存在，而根據釋藏經文與其音義，皆無證明烏夷或烏者名稱之不誤者（僅可洪在九四〇年駁隋夷之誤二說），則幾乎可以斷言釋藏中之烏者皆爲焉者之誤，並不是從烏者誤作焉者。我們幸而有上溯至漢代的記錄，證明其名是焉者而非烏者，這就是斯坦因君所得的兩片漢簡（參看沙哈斯坦因發現之漢文簡册第九三〇同九三四號）。此外或者可將哇特斯（參看傳第一册四八頁）從前所擬的一種比附提出作爲假說。後漢書（卷一一八）

設焉耆國都在南河城，而前漢書(卷九六下)設在員渠，北史(卷九七)引其文(又從北史轉錄入魏書卷二〇)。顏師古註員字之音爲于權反，足證此字不誤；至若渠字，在前漢書(卷九六下)著錄的其他國名如渠鞞番渠之類，亦見用之。則謂員渠也焉耆之同名異譯，似無不可能也，蓋以國名爲都城名之例常見有之。註三：

註三 沙晚受法顯傳烏夷名稱的影響，曾將屬實(Kaehmitte)人卑摩羅文(Vimalaka)於三六四年龜茲陷沒後避居之烏羅，考作焉耆，實言之，哈喇沙爾(通報一九〇五年刊五六頁)；沙晚所本者實貞元新定釋教，錄卷三五之文，其實早見高僧傳卷三卑摩羅又本傳一宋元明藏皆作烏，高麗藏獨作焉，可參看數字卷第二册九頁，同開元釋教錄卷三。可是同一烏羅名稱並見八世紀末年情狀記著錄，視爲 uddyana 之對音(亞細亞報一八九五刊第二册三四八頁)，卑摩羅又既避東方之亂，當然西走印度；Iasuh 君(中國釋教考三三九頁)說他「行向東境」，毫無根據，或者是因辨沙晚考證之誤。我在卑摩羅又時代之後不久，見有著錄同一烏羅名稱之文。隨書卷二六：永定元年十月庚辰(五五七年十一月二十一日)「詔出僧牙於杜梵宅，集四部說無遮大會(無遮非譯音，可參看通報一九二九年刊一八四至一八五頁)。高祖親自出闕前禮拜。初，齊(四七五至五〇二)故僧統法獻於烏羅國得之，常在定林上等。梁天監(五〇二至五二九)末慧志密送于高祖。至是乃出」。我不欲在此處作一種佛牙研究，直輯其文可成專書；有一佛牙會由波斯使臣在五三〇年(歐中國(參看 Yule and Cordier 馬可波羅行記三册三三三頁)：Great Jour Thupa, 27) 開有一佛牙會於那羅羅(Nagarahar) 國收歸(西域記卷中)；法獻若在焉耆，考說佛牙必不可能，烏仗那(udhyan) 應是實那佛牙之當

然地點，而且爲三百年後僧空行記所證實。最後我檢得一條關於烏羅之記錄：是即五一九年獲之高僧傳卷十四法獻傳。法獻在四三九年止於定林上等。有志「仿效智猛西遊，於四七五年發足金陵，西遊巴蜀，道經青苴(War)而達于員(和闐)。欲度葱嶺，值機道斷絕，遂於于闐而反，獲遺物多種，內有佛牙一枚。高僧傳說：其機道危阻，見其「別記」，此記似佚。傳繼云：佛牙在烏羅國，自烏羅來苴苴，自來梁土。獻嘗牙還京師，十有五載，猶自禮事，餘無知者；四九〇年皇帝感夢，方傳道俗。獻歿於四九七年，或此年前不久。與其同僚玄暢同葬鍾山之陽；獻弟子僧祐，爲造碑墓制，沈約製文。獻於西域所得佛牙及像皆在上定林寺。五三二年被人執仗去，後不測所在。案高僧傳成於五一年，而此傳言及五三二年事，蓋爲後人增入之文。烏羅既非烏仗那，何以法獻未歸而得佛牙？傳文既云佛牙在烏羅國，疑非法獻本人親得，可並參看開元釋教錄卷六達摩摩提(Dharmadati) 僧伽跋陀羅(Sanghabhadra) 兩傳。

如前所述，哈喇沙爾國之古名，紀元前有焉耆，流傳一直到唐代；或者應以員渠附焉；紀元四百年左右有一焉夷名稱；註三還「有時代不明的嬰夷，不甚確實，不能加入考訂之列。五六六年譯的梵本月藏經寫作億尼，此時以後的藏籍供給梵文 Anni 的名稱，業經玄奘實譯寫爲阿耆尼。然則應從呂僧司之說，好像此國「在任何時代有一印度名稱」麼？我以爲不然。若說焉耆同焉夷是土名的對音，似乎較爲自然；Anni 即因與此土名音讀相類，所以梵語化了，而此 Anni 梵名復又在五六六年轉爲億尼，又在玄奘記傳中轉爲阿耆尼。庫車的土名曾由梵語轉爲屈支(Kuci)，和闐的土名曾

由梵語轉爲韻薩旦那 (Gogiana)，羅布土名曾由梵語轉爲納縛波 (Navara) 其理皆同。我反覆申言者，因爲恐怕有人以爲梵語名稱是原有的，而推想新疆那些古國乃是印度的移民建設之國。諸國連同他們的土名早已存在，可是後來皈依佛教以後，新疆一帶受了印度社會的感化，這些國名因而梵語化了。

註三三 譯者焉夷兩名中者夷兩字互用之間，在其他譯名亦見有之，例如外道師 Añña 的名稱，除通用的譯名阿耨多以外，尙有阿夷的譯名；可參看龜田得能佛光大辭典六版十一頁；翻梵語 (大正本第五四册一〇一四頁) 別著幾有阿夷譯。這些不同的寫法，要因一非漢名一讀法方言殊異所致。法顯傳保存有不少根據婆羅門化的方言之譯名；所以他譯仙人 Añña 的名稱作阿夷。

此種解說雖然冗長，第欲將中國古籍中根深蒂固的訛誤屏除，亦自有其必要；註三四 附帶可以屏除貝烈君的 OKH 同由此字發揮之說。

註三四 好像中國日本的考據家尙未有人討論此焉夷譯者此爲焉夷者的問題。東

方學報第一卷 (一九三二) 八頁一篇專門論文中尙以焉爲正寫，而在燕京大學刊行的水經注引得尙見有此寫者。

我還有一未後之聲明。我們用以考訂中國古代譯名的音韻，就是六世紀左右流行的音韻；這種臨時性質是未能隱諱的；例如古韻之 *ei*，可對外國語之 *ei*，亦可對外國語之 *ei*，然而切勿假擬其有二韻母相合之音。就是譯名也應該將現在讀音列於古音之前，因爲祇有現在讀音確實可靠。若是僅用理論的古音來寫純粹的中國歷史名稱，好像不對。貝烈君用古音寫宋雲慧生等類的名稱，不可爲法。是無異於尋求一種毫無功用的糾葛，其使 *de Groot* 的匈奴考不切於用的，就是誤本同一原則。

我在本文中並未言到問題的本身，祇想將若干不能與貝烈君同意之點說明。可是我要反覆聲明的，貝烈君此編佳作材料豐富，祇有一伊蘭學師始能真輯有此種成績。

西北沿邊圖籍寓日記（二續）

張紹典

川藏奏底二卷

有奉撰 鈔本 二册

本書所收均係有奉由川抵藏任時諸奏疏，原未題名，川藏奏底四字當係傳寫者所加也。計收有光緒二十九年閏五月九日，八月十八日，十二月二十七日等三奏。三十年七月二十日，九月二十一日，十二月十日等三奏，及四月初二日班禪額爾德尼奏。三十一年正月二十四日，三月二十四日，四月二十八日，五月二十九日，七月十一日，九月十日，九月二十六日，十月二十二日，十一月二十七日等九奏。三十二年二月九日，三月十五日，閏四月四日，五月六日，六月十三日，七月十八日，十一月二十八日等七奏。其中奏疏，最爲有關於藏事者，即三十一年十月二十二日奏爲班禪額爾德尼於十月四日被英人誘赴印度，及三十二年三月十五日奏爲班禪由印回藏事，比即與英議藏印正約之事也英人之視西藏，早已爲其所有，誘班禪之入印度，不過小試身手，一探中國之應付如何爾，而當時之外務部，不過僅作迅速查覆辦理等公文而已。曷勝可嘆！

籌藏收贍奏稿三卷

鹿傳霖撰 清刊本 三册

籌藏收贍奏稿三卷，鹿傳霖撰。鹿氏於清光緒二十二年間，任四川總督。時贍對官吏，越境率兵，干預朱窩章谷土司爭襲之案，不遵開導，鹿氏因而聲罪致討，於是檢兵深入險阻，不及三月，克定全贍，因有收贍改土歸流之議；此書所收，即當時鹿氏關於贍對之奏議也。按贍對乃環繞四川之土司，其地最險，其人頗強，原本爲上中下三司。當道光年間，中贍最爲強盛，土酋工布朗結父子，性又悍鷙，遂逐漸吞併上下兩贍，合而爲一，復恃其地險人強，時擾各附近土司；時琦善督蜀，撥兵往剿，而贍對拒險拒守，征討經年，喪師糜餉，迄無功績，贍對因而益自驕橫，目中無人，致叛亂多年，屢剿未平。咸同以來，髮捻擾攘，中原多事，無暇籌邊，贍人益四出侵犯，致梗蜀邊茶商運道。及同治四年，有川藏會剿之命，時川省派委道員史致康督兵至打箭爐，遷延不進，藏兵先捷，攻克贍對，遂據有其地，藉口耗費兵餉三十萬，索償如數，始允交回。

土地。偵川中匪人藍大順正形猖獗，幣餉亦極支絀，籌款無從，史致康爲慮目前之困難，因請以其地賞歸西藏，由達賴喇嘛，設官治理，此瞻對撥歸西藏管轄之原委也。藏俗馭民，向極苛刻，藏官治瞻，尤爲暴虐，瞻民不堪荼毒，時起爲亂，故數年必起一內亂。光緒十五年，瞻民曾有驅逐藏官之舉，並爲根本解決計，乞歸內屬，以解倒懸。時督蜀者僅以維持目前爲原則，並未根究其原因，乃誅瞻民之首禍者數人，而對於西藏所派官吏，撤回另派；西藏爲鎮壓

瞻民，加派藏兵八百，堪布一人助守，是不特對於藏瞻之糾紛未能解決，而藏官固有藏兵助守，其虐待瞻民尤甚於前。鹿氏自就川督任後，以瞻對爲川省藩籬，其地本係川屬土司，去藏遠而距川近，因有收回其地，以固川省門戶之心；但須待機而動，方爲師出有名，故於瞻對越境干預朱窩章谷土司之時，認爲良機已至，不可再失，因而派兵深入，收復其地，并請撤回藏官，設官撫治，除其苛政，安其人民；并擬於疊蓋地方，勸修電線，以達於藏，藉圖聲息靈通，以便控馭藏地；藏地就道，則英俄窺藏之野心可以稍息；鹿氏之慮心頗虛，不可謂不深遠，其目光之銳敏，不可謂非先知先覺者。顧當時之執政者無遠大之計劃，未能統籌全局，僅以頭痛治頭脚痛治脚之辦法，以敷衍目前苟安一時爲上策。鹿氏終因同官之傾軋，以德格土司事，辦理未善，解去川督之職，前案因之全翻，鹿氏

所擬盡成畫餅。故鹿氏有竊慮此後藏不可保，劉亦必危，屏藩盡失，大局何堪設想之嘆也。此奏稿上中下三卷，所收鹿氏經營籌劃之奏疏都凡數十首，并附籌藏收瞻電旨電奏彙存，此書不特可見鹿氏當時籌劃之苦心，并可考見當時瞻藏情形，而當時執政者之昏愎，與夫政治之腐敗，均可於字裏行間窺其一斑也。

駐藏程站不分卷

鍾方著 鈔本 四冊

駐藏程站不分卷，原亦未題著者姓氏，按三月十一日記有，余因駐藏宿頭道水公館觀飛瀑有感題云：誰常棄水在山頭，故使飛泉晝夜流，圖畫誠然天造就，乙年北上再來遊。道光歲次癸卯三月中浣日哺隨筆，午亭鍾方題。則此書著者當爲鍾方也。又本書所記始於二月三十日，則亦當係道光癸卯之二月，是書乃作於道光二十三年也。首記成都府至雅州府共三百六十里，次記由雅州府至打箭爐城五百五十三里，再次即記巡邊由前藏南路至後藏路程，九站八百五十五里，後藏至定日汎路八站共計程七百五十五里，後藏由北路回至前藏路程十站，共計程九百五十里；以上所記皆係以日記體載所記，每日到某處，有何名勝，有何古蹟，形勢如何，風景如何，均一一備載，惟所記自雅州府至打箭爐後，即記以巡邊前後藏事，中間富有遺漏，疑係傳鈔者所遺也。再次記江孜汎所轄相距帕克囉

各口隘程站里數，後藏汎所轄各口隘程站里數，定日汎所轄各口隘程站里數，則均僅記程站里數，非復如前者之以日記體裁矣。按此書雖以駐藏程站名書，而實爲由川入藏之遊記，所記述風景古蹟，足供喜臥遊者之欣賞，惟悉中間有殘缺耳。又本書之後，附有關於四川之種種名勝古蹟等，不知是否亦係鍾方所著，容詳考之，以其與駐藏程站無關，故略之。

三省入藏程站記

范鍾撰 光緒三十三年石印本
一册

本書乃記由西寧入藏程站，由成都入藏程站，由雲南入藏程站，故以三省入藏程站名書云。由西寧之丹噶爾至拉薩，凡七十三站，約五千餘里，每站均記其異名及所在地，亦間有記其應行注意者，如第二十站哩布六，走都克湯平坦地多醉馬草，行人于此站，乘夜兜馬口而行。由四川成都至拉薩，凡六十站，共六千餘里。由雲南昆明至瓦合塘，凡五十九站，共三千八百餘里。每站至每站之間，均記其里數，以及道路崎嶇或平坦，間亦記風景傳聞習俗等。又於西寧入藏程站後，附錄有唐時鄆州郡城縣至吐番牙帳故道及唐劉元鼎使吐番記略，因唐代與吐番關係甚切，其往來道路，較他代爲詳，故附及之也。

章谷屯志略一卷

吳德潤撰 撰特安書本 一册

清代官制之設屯田職，自乾隆朝平定大小金川始，章谷屯即當時所設懋功廳五屯之一也。章谷屯在四川谷城西一千二百里，管轄俄拉宅巖屯守備部落，及屯練各寨堡。西南距廳治一百八十里，東西距二百八十里，南北距九十里。東界懋功屯屬價格宗汎小山梁，計程一百二十五里。南界明正土司境之孔玉山。西界革布什咀土司境之沙沖溝。北界納頂山梁與巴旺土司境交界。東南界懋功屯屬漢牛思噶拉山。東北界崇化屯屬之曾達溝。西南界明正土司境之大泡山。計程一百五十五里，爲大小兩金川赴打箭爐入西藏咽喉要地。西北界崇化屯屬之林卡塘，計程一百二十五里。按章谷屯乃冉駹舊地，雖僅偏隅，而石棧天梯，實要荒衝阻之境。同治十一年壬申，吳德順氏履章谷屯，因述其天時，疆域，山屯，衙屬，祠宇，橋船，官吏，丁役，學校，兵民番練，戶口，科糧，街市，鄉村寨落，及兵民番練，保甲丁口，風俗土宜物產等，著爲章谷屯志略一卷。此乃就前人著述，增其所未詳，刪其荒唐者；更即章谷屯境內，徧歷周覽，加以諮詢，審其形勢，察其性情，故是書所載，除據載籍所記之外，更加以親自攷察所得者也。至其所以名爲志略者，因此書藉以備後人纂修屯政志者所採擇爾。又按章谷屯於光緒年間，隨瞻對改流，瞻對嗣又歸還西藏，章谷屯以無嗣故，仍由川省委員管理，現爲西康之鹽澤縣。

巴塘志略不分卷

錢召棠輯 鈔本 二册

巴塘爲古白狼國，即今西康巴安義教德榮鹽井等縣地。在成都西北二千二百餘里，打箭爐外一千三百五十里。舊屬西藏，康熙

五十八年五月二十四日，該地僧俗人等赴寧遠大將軍行營投順，歸隸版土。雍正四年，由都統及四川提督會勘邊界，以南墩以東歸林

際山梁，定爲四川西界，改名寧靜山，訂立鄂博界石，其外土地人

民，給邊賴喇嘛管理。五年，川滇分界委合州知州及化林營守備，

會同滇省委員，歷查勘議，以巴塘所屬奔子桶阿墩子等處，移駐土

司，撥歸雲南。八年小河營守備招撫臨卡石等十二處番民歸巴塘土

司管轄，統計境內東西距四百六十里，南北距七百八十里，東南距

西北九百十里，週圍約二千七百餘里。本書著者錢召棠氏，浙江嘉

善人，於道光二十二年任巴塘糧務，因述其通道，疆界，輿圖，山

川，職官，兵制，賞卹，衙署，廟宇，塘汛渡船，賦稅，臺庫，支

放，糧務題名，土司物產，風俗遊覽等，爲巴塘志略一書。惟巴塘

土官愚陋，文案無徵，私家又鮮紀述，故就所目覩者詳爲記述，至

他人所述，與實際不符者，亦不牽合附會，蓋至爲慎重也。後附巴

塘竹枝詞四十首，多係咏巴塘之風俗人情者，間用巴塘土語入詩，

頗爲別緻，每詩之下，均加以注釋。又本書所記，均在錢氏任職之

西北沿邊圖籍高日記

前，乃道光年及道光年以前事；其後至光緒年間，因土人以墾荒事
戕害駐藏大臣鳳全，清廷派兵懲剿，擒誅其土司，并先後改流，設
巴安府鹽井縣三壩廳，德榮委員，隸於川滇邊務大臣；民國後，西
康建省，遂爲今西康之縣屬矣。

我過去的西藏

釋法尊著

民國二十六年重慶北

格致書院出版

一册

法尊法師爲近代著名之西藏學者，在藏留學多年，先後入藏凡
兩次，是書即其返蜀時途中所作也。專記西藏之一般政俗情形，乃
就耳聞目覩者，乘筆直書，對於西藏民性與過去漢藏糾爭之經過，
紀述最詳，其他紀述，雖不免有過於瑣屑之處，然使人讀之，頗有
聞所未聞見所未見之感，足資爲談西藏者之參攷，尤其以超然物
外之精神，與胸有成竹者所記，大異其趣。全書共分十節，第一節
記入藏各路之情形及藏土版圖之廣袤，而特詳於由川邊打箭爐入藏
一路，以其親身所經故也。第二節記西藏人烟之稀薄，詳述著者由
打箭爐經前藏後藏至藏印交界等處，沿途經過各程驛，居民多寡民
情風俗，以及述中所遇之困難，所受之痛苦，娓娓動聽。所記哲孟
雄地方，英人設立教堂，收買人心，對於當地人民，頗施小惠，以
施其懷柔政策，讀之令人爲之胆慄心寒。第三節記述從前駐藏漢軍
之兇蠻無理，乃至構造漢藏起釁之原因。第四節記述英人對付西藏

之關策手段，如印度開卡對待漢商或旅客，如發見有携帶絲織物品，勿論其多寡，則須繳納關稅，而對於藏人，不惟免稅，且予免驗。又於軍政方面，亦屢施其各種手段，以爲侵略之張本，一有機會，便可乘虛而入也。第五第六兩節，分述西藏當局對於中國政府之態度及對英之政策，并述駐藏大員之措置失當，有辱國體，因而屢遭藏人之輕視并侮辱之，此均非他人肯述敢述者也。第七節記西藏當局對於班禪離藏及回藏之態度。第八第九兩節，爲記述著者到藏後所聞所見，以及參與幾次宴會之情形及經過，多係記述駐藏大員之貪私舞弊，不盡職責，以及魚肉漢商之種種笑話。第十節爲全書之結束，并申述著者解決漢藏問題應採之途徑。著者爲佛教中人，其所論述，容有一偏之見，然其無政治上之成見，故所述皆人所不敢言，或不能言者，實足爲研究漢藏之癥結者，所資借鏡云。

壬子邊事管見

羅廷欽撰 民國二年鉛印本 一册

壬子邊事管見，羅廷欽撰。廷欽四川瀘陽人，喜研究邊務，尤喜西北地理，凡有自西北歸來者，即虛心就訪其風俗，制度，山川，物產，及其他一切情形。曾肄業於殖邊學堂，著有統籌蒙藏教育交通兩全策。民國成立後，發起西北協進會，一面籌劃挽救蒙藏方法，更發表收拾西北及中央管理蒙藏機關，此書即收民國元年（壬

子）羅氏對於邊事之意見書者也。計有上大總統袁前總理唐挽救蒙藏條陳，上大總統靖藏意見書，呈總裁請與銓叙局交涉劃分權限說帖，上國防會長徐紹楨先生籌劃對付俄庫說帖，蒙藏局改組意見書，上總統總理總裁爲藏事危急應陳管見書等，更附有四川公民黨一次及第二次聯名呈袁大總統書。其中除上國防會長籌劃對付俄庫說帖外，餘則多係有關於西藏者。羅氏當時對於籌藏之意見，爲速派宣慰使齋書西藏前往宣慰。宣慰之法，乃利其宗教，因其迷信，投其所嗜，伸其疾苦，并佈告內地革命之起因，共和之真意，表顯大總統之德澤，及維持黃教洞療全藏同胞之熱忱，解說五大族同原及分合之利害；文話不行者，以口舌濟之，口舌不及者，以文話達之。藏人貪權，餌以小利，藏人信義，施以甘言。所經關塞山口，及形勝要害之地，人烟稠密之區，如其長官首領服從來歸，即給以中華民國委任狀紙，委訂章程，令其遵照辦理，或派人勸贊之。其偏強者，則與之反覆辨詰，痛陳利害，務使就我範圍，服從法令而後已。更爲組織選舉會，令其選舉議員，俾其共同得參政。其所論蓋實確爲當時籌藏之要圖也。又藏地距中土太遠，風俗人情，均甚隔膜，故治藏之策，要不可以普通情形處理之，以免信息訛傳，而蹈危機，必需深明其底蘊，始得就病擬方。故羅氏條陳治藏辦法，首重及此。略謂道途險遠，信息不免訛傳，山口聚封，進步亦殊不

島；況其中不無懷野心蓄貳志者，非深明底蘊，一有阻隔，即蹈危
 機。故偵探隊不可少。或作喇嘛，或作商旅，或裝醫卜星相，或
 憑精靈回語文者，充當蒙回代表，與之互相聯絡。以探測其誰為亂
 首，誰為主謀，誰係最孚衆望之領袖，誰係最有勢力之喇嘛，其中
 是否真有外人煽惑，手段若何，是否真有外兵援助，共係幾許，何
 關把守最嚴，何道利行無阻，以及人心向背之多寡，喇嘛黨派之優
 劣，兵力之強弱，火器之精粗，各地險要之情形，隨時探明，隨時

報告，作因應方略之根據，並隨時轉報中央政府，為對藏設施之要
 本。并調查其戶口若干，稅目幾項，出何物產銷何物品；與夫氣候
 之寒暖，土質之肥瘠，何地宜糧，何山宜牧，以及林礦魚鹽之利，
 風俗習尚之殊，逐一詳考，為善後政策着手之材料。所論皆係腳踏
 實地之工作，與當時之紙上談兵，空言藏事者，大異其趣，特惜當
 時政府，未能採擇，致羅氏之言，仍付諸泡影耳。

季刊 中央亞細亞

第二卷目錄(民國三十二年四月)

- 羅布澤爾考.....李長傳
- 河套之史前文化.....龔文中
- 特稿 契丹と中央亞細亞との服飾の類似に就て.....島居龍藏
- 乾燥亞細亞一角的語言系統.....錢端范
- 中俄伊犁交涉始末.....陳嗣初
- 明代西番馬考.....李光璧

第三卷目錄(民國三十二年七月)

- 中亞古民族的新認識.....馮錫三
- 甘肅土人的婚姻.....楊堃
- 湖谷區域之山形與盆地地形.....祥伯
- 中部天山.....鄭子修
- 蘇領中亞經濟地理.....魏聿宏
- 讀駐藏大臣有泰日記.....庚年
- 西北沿邊圖籍實目記.....張紹典

第四卷目錄(民國三十二年十月)

- 中亞地質之研究.....龔文中
- 中亞地理之貢獻.....祥伯
- 中亞歷史之研究.....馮先恕
- 一、西域史籍.....周長海
- 二、西藏史籍.....周長海
- 敦煌學.....周長海
- 西藏文化研究述略.....周長海
- 中亞旅行概述.....周長海
- 一、新疆旅行.....魏聿宏
- 二、西藏旅行.....魏聿宏
- 蘇領中亞經濟地理(續完).....張紹典
- 西北沿邊圖籍實目記(續).....張紹典

亞洲地質之一問題

法國 德日進 原著
灤縣 裴文中 節譯

蒙古相

註 1

原著者德日進先生，生於法國中部一貴族之家中，幼年時即入天主教耶穌會讀書修道，成年後兼任「神父」。德先生曾任巴黎公教大學教授，及法國地質學會會長；民國十五年時來華，在甘肅陝甘及河套等地，考查地質及實行考古工作，屢有重要發見，成績昭著。後被聘為中國地質調查所名譽顧問，復興中國地質學家合作，在國內各地工作，屢蒙日誦，現為世界上知名之地質學家。現德先生任法國各國立學術機關之人類地理學高等研究教授（名譽職）及北京私立地質生物研究所地質部主任。

一節譯者

註 1 地質學上，「facta」一字，中日文皆譯為「相」字；然中文之「相」字，實不能表示「facta」之意。吾意當譯音，如「法賽斯」，在地質學上，有特殊意義。

蒙古高原及其南北近隣（如第一圖斜線所佔之區域），約在東經八十五度至一百二十度及北緯四十度至五十度之間，共佔面積約一百五十萬平方公里。吾人若由此廣大之亞洲高地之一端，旅行約二千公里，而至此長方地區之他端，則覺全程所見者，並無若何變化。吾人所見永為相同樣之平地，相同之凹地和相同之山嶺。地理學家，民俗學家或博物學家，或者認為此蒙古相同之地形，僅因此

地區為大沙漠之故。但地質學家若由蒙古穿行，立即可以看出，此一帶地區之相同地形，並不僅為大地之表面，其內部亦皆相同。

蒙古地域之內部，成分相同，組織相同。（即地層之岩石性質相同及地質構造相同）。有相同之地質構造及相同之岩石，再有相同之氣候，相同之植物及動物界，蒙古地區，形成一個特殊的單位——廣大之高原，其頂為一平原，介乎西伯利亞及黃河流域之間。此即余（原著者自稱）所謂之「蒙古相」，凡欲研究亞洲地質發生史及構造者，當視此為重要之一問題，余略說如下：

（一）蒙古之岩石成分——花崗岩及花崗

岩化之堆積物。

（A）底 基

註 1

註 1 原文為「Stole」，為房廊下部根基之意。

吾人如觀蒙古地方岩石，約有百分之九十五為下列三種：（1）

花崗岩，(2)花崗岩化之岩石(即各種岩石，經變質後，而與花崗岩相似者)，(3)砂岩及砂質片麻岩(即經變化後，由上二種岩石直接生成之岩石)。以上三種岩石，約屬於三不同之地質年代，分述如下：(參閱第二圖)

(a)在最下部者，屬於寒武紀以前之時代。此種岩石大部為花崗岩及閃長岩(曾受重大壓力)，少部為結晶及變質之岩石(如雲母片岩，石英岩等)，及其少之薄層大理石。以上各種複雜之岩石，地質學家，多謂之「五台系」，認為較「泰山系」之年代為晚，雖至現在止，尚無確証。

(b)在五台系岩石之上，為不整合現象，為所謂之「渤海系」；岩石為砂岩，砂質片麻岩，偶有薄層之海生灰岩，內有化石甚少。雖說我們不能將灰岩及砂岩之關係，辨別清楚，但可以總括言之，其年代為古生代晚期(一部為石炭紀，一部為烏拉—二疊紀)。按余之管見，此渤海系之岩石，並非生成於「大地槽」之中者，只為生於穹地(Dome)之邊緣者。

渤海系之岩石，曾經劇烈之變質作用，有大量之花崗岩侵入，花崗岩之附近為片麻岩，更有甚長之石英岩脈伸入渤海系之地層中。

余認為此種花崗岩，相當於不同之二次造山運動，一次之時代晚於維塞系(Visean)，一次晚於二疊紀。余因而名屬於前時代之花崗岩為「天山花崗岩」，屬於後時代者為「蒙古花崗岩」(參閱第二圖)。

(c)渤海系之上，仍為不整合現象，為屬於三疊及侏羅紀之地層，岩石概為砂礫及礫岩。此種地層，曾經較輕之變質作用，有一種特殊之花崗岩侵入，此種花崗岩，即著名之「燕山花崗岩」。

(B)頂蓋

上述太古代之五台系，古生代之渤海系及中生代之砂岩及礫岩，共構成蒙古地方之基岩；且此三種層系為變質作用及地殼變動所擾亂，互相交錯，不易分辨。

此種底基岩石之表面，繼續受浸蝕作用，而成低凹之盆地；由白堊紀起，在此盆地之中，開始沉積作用，是為蒙古高原之「頂蓋」。

蒙古高原表面之堆積，生成之經過如下：

(由在下之古老地層，順序至在上之新晚之地層)
含恐龍類化石之砂岩，及薄層而含下白堊紀魚類化石之地層。

白堊紀晚期，生成含恐龍類化石之粉紅色「黃土」(Loess)。

；有結核之紅色土，內含甚小之哺乳類化石。

古新統時，生成含化石又夾有粘土之砂層。

含 *Thaurotherium* 之地層，如紅土，砂層，及礫石層等，內

有化石甚多，其年代為始新統及漸新統。

含板齒象 (*Halysictodon*) 之地層，底部為紅色粘土，含

Lanproutia 之砂層，及白色粘土，其年代屬於中新統。

蓋蒂紀之紅土及白色河湖堆積(下部上新統)。

註1 現今國地質學家，多將古新統 Palaeocene 劃為一單獨時期，相當於歐

洲地質學家所謂之下始新統 Eocene Inferieur。

在以上各種地層之上，散佈薄層之基性火成岩，如安山岩(圖

二之A)及玄武岩(圖二之B)。

上述各種堆積物，造成蒙古高原之「頂蓋」；經侵蝕作用之後

，破裂成不連接之段落，高低不平，是即旅行家所謂之沙漠區域。

上述各種堆積物生成之後，在蒙古地區，地質作用完全停止，

與中國本部不同，無較晚之堆積物。註2

註2 中國本部有「黃土」及「紅色土」等；在蒙古區域，似僅有古海(諾爾)所

生成之地層及風成之砂丘等。

x x x x x

總括上述各點，估據中亞大部之蒙古，在各地質時代中，陸成

各種地層，週期花崗岩化，至白堊紀之後，則此陸成岩石之組織，

漸行粗大，而成沙漠。此地區之地質史及現象，均甚特殊，故余名之為「蒙古相」(法賽斯)。

此蒙古相之結果，大部生成砂層，粘土及花崗岩。吾人當如何

解釋之？欲回答此問題，吾人當先說明上述各岩石之構造。

註1 即每層一時期，發生花崗岩，其先成之岩石，一部變質如花崗岩。此種作用，進而復始。

(二) 蒙古之地質構造

蒙古地方永無一個好的地質剖面；如第三及第四圖所示，地層

永為甚窄之斷片；沉積岩層，為無數之岩脈及梭形之噴出岩所隔

斷。

余意欲明瞭蒙古之地質構造，實不能就此區域而研究之，必於

其隣近之地考查之始可。例如熱河，其地之構造簡單，或可使吾人

間接明瞭蒙古之情形。

余曾數次指明，由渤海灣至興安嶺南部之區域中，其地質構造

有特殊之性質。主要之點，如：此區域中有連續之侏羅紀或白堊紀

之盆地，此盆地為堅硬之岩石(多為震旦紀之灰岩)所隔離。此外尚

有酸性岩石(如流紋岩及花崗閃長岩)，由縫隙間侵入。故此區域之

地質構造，概為：中間為長軸(外面形成山脈)，兩旁為平行之「彎

曲] (Elexure) 註 1, 此彎曲更爲酸性岩石所侵入。

註 1 此爲原著者所新創之名辭, 可參閱其著作 5 之第 10 圖 (四〇頁)。

吾人若想像此熱河區域之特殊地質構造, 生成之經過, 或如下述之情形: 先生成之砂岩及粘土, 經地殼之變動, 受壓迫及侵入之作用, 變爲硬砂岩及花崗岩化之片麻岩; 同時在此第一次盆地 (即先生成砂土及粘土之地) 之上, 又生成第二次盆地。其後第二次盆地又受壓迫及侵入, 發生斷層, 岩石受動力變質作用。此種循環現象, 或會連續至三次。

在我想來, 上述之地質構造之生成經過, 其結果, 則發生「蒙古相」之地質現象。

※ ※ ※ ※ ※

李爾克 (Barkey) 及莫里斯 (Morris) 研究蒙古之地質時, 曾謂蒙古之地內構造, 爲一甚大之花崗岩基, 其上漂浮着一段一段的渤海系地層。但據余個人之意, 蒙古地域之內部, 則爲連續之垂直階段所組成, 此階段爲片麻岩砂岩及礫岩; 其相隣之階段則爲花崗岩或斑岩; 此兩種不同岩石之階段, 交互而生, 在此廣大之蒙古地域中, 構造相同。

余覺余之臆說, 頗有優點。相同之岩層, 曾經數次相同之動力作用 (如壓迫, 斷裂及侵入), 在悠久之地質時期中, 相同之現象,

亞洲地質之一問題

重複實現。因之, 吾人在蒙古地區, 實不易分別各種相同之岩石 (如片麻岩, 花崗岩等), 屬於何一時代 (由侏羅紀至石炭紀或再較古)。至侏羅紀之後, 此同樣之現象, 仍在蒙古重複不已, 因而生紀至第三紀之盆地堆積。惟中生代晚期以後之現象, 則僅在花崗岩成白堊化底基 (參閱 (一A) 之表面, 故只有基性之噴出岩。

(三) 蒙古相之解釋 穹地之發生史。

總觀蒙古之岩石及地質構造, 實爲重複之碎屑性地層, 按一定之週律, 受壓縮之壓迫及酸性岩石之侵入; 此壓力及花崗岩化作用漸次減少, 但同時構成岩石之粒層, 漸次增大。至最後, 生成礫石層及河湖堆積。此種堆積現象之過程, 甚似山脈山麓附近之情形。

如更肯定的解說, 吾人可想像蒙古之發生史如下:

在蒙古地方的一個大穹地 (Dome), 慢慢隆起, 慢慢向四方開展 (好像很有彈性似的)。此一穹地時得以自由, 因地內之岩漿及機械之壓力, 常常將穹地衝破——此即蒙古高原生成之經過。

余認爲「穹地」之說, 似有甚可信之理由: 即此地多爲碎屑性之堆積物, 震旦紀之海水前進僅及此地之邊緣, 寒武及奧陶紀之海水地層完全缺乏; 石炭紀及侏羅紀時無低濕之地, 可生長變爲煤炭

之植物(蒙古無煤!)……諸原因。

此外蒙古相之地質現象，更向其四邊慢慢伸展，例如：在河套及山陝熱冀諸地，由石炭紀起，蒙古相之砂質堆積，漸次生成(多在奧陶紀地層之上)。同時，花崗石之生成，至少有三次連續之移動，由西而東，有如起伏之海浪，移動之時代約為石炭紀至白堊紀(參閱著者著作之4)。

※ ※ ※ ※ ※

如以上穹地隆起之設為是，則吾人當追求此蒙古穹地隆起之原因。

余對此問題，有下列二種想法，但現尚不能決定何者為是：

(1)如地質學界先賢蘇魏士(Suess)及阿爾剛(Arctand)之解釋，亞洲大陸與印度大陸，互相壓迫，而生出機械動力，使蒙古穹地上昇。

2 與前說相反者，實曾倡導於維理士(Bailey Willis)，即花崗岩之岩漿，在大陸之內，有一種強大之壓力，因而使此亞洲之高原，漸漸上升；且因受其隣近陸地之限制，故凸出似圓形之地。

節譯者按：德先生原文，用字恰當，文筆流利，且將深奧之地質原由，山淺近之通俗文字寫出，實為至上之作。惟節譯者既未按字直譯；又未能取其原意，且中文寫出，只譯出大意，且因中文名詞之關係，多有詞不能盡意之處，深望為歉，至蒙古高原之生成史，節譯者亦略有所見。節譯者之意：蒙古與西藏二高原之生成，情形略同，惟生成之時代不同耳。西藏高原之隆起，與喜馬拉雅山之生成為同時，起於中新統。蓋印度陸地曾向北移動，與西藏陸地中間之地，一部凹入，是為斯瓦里克大地槽(Sivalic Geosyncline)，一部凸出為喜馬拉雅山。同時西藏部分之地殼隆起，下部山花崗岩之岩漿填充。印度陸地之向北移動，至上新統之時，尚甚劇烈，因之西藏高原之地面，尚多高起之山脊及更深之山谷。反之，因蒙古高原之隆起，至白堊紀時，即行停止，其地面久受侵蝕作用，故成為淺蝕平面。為讀者參考及補充原著者之意起見，特附註數語於此。

BIBLIOGRAPHIE

Berkey, C. P.

- 1932 Unsolved Problems in Central Asia. *Natural History of Central Asia*, Vol. I, pp. 575-590.

Berkey, C. P. and Morris, F. K.

- 1927 Geology of Mongolia. *Natural History of Central Asia*, Vol. II.

Teilhard de Chardin, P.

- 1926 Etude Géologique sur la Région du Dalai-Noor. *Mem. Soc. Géol. de France*, Nle. Série, tome III, fasc. 3.
- 1932a The Geology of the Weichang area. *Bull. Geol. Surv. China*, No. 19, pp. 1-46.
- 1932b Observations géologiques à travers les Déserts d'Asie Centrale. *Revue Géogr. phys. et Géol. dynamique*, vol. 5, fasc. 3.
- 1940 The Granitisation of China. *Bull. Geol. Soc. China*, Vol. XIX, pp. 341-377.
- 1943 The Genesis of the Western Hills of Peking. *Geobiologia* (Revue de l'Institut de Géobiologie de Pékin), Vol. I, pp. 17-49.
-

Cambro-Ordovicienne marine; absence, bien symptomatique aussi, de tout marécage à végétaux pendant le Carbonifère et le Jurassique (pa. de charbon sur le Gobi!)...

Et dans cette hypothèse, ensuite, nous découvrons le moyen d'expliquer la remarquable irradiation du faciès mongol sur la périphérie du Gobi au cours des âges: extension des sédiments gréseux, par-dessus l'Ordovicien, en Ordos, Shensi, Shansi, Hopei, Jehol, à partir du Carbonifère⁽⁹⁾; et, simultanément, migration des granites, par au moins trois vagues successives, de l'ouest à l'est, entre le Carbonifère et le Crétacé (cf. Teilhard, 1940).

Si le Gobi a joué, *dans son ensemble*, comme une seule grande flexure au cours des temps géologiques, ces diverses particularités s'enchaînent de manière cohérente et prennent un sens précis.

Et maintenant, pour finir, une dernière question.

Si les perspectives ici proposées sont admises, à quelle cause géotectonique profonde convient-il d'attribuer la progressive érection du dôme mongol, et sa granitisation *sous pression*?

Conformément aux vues classiques de Suess et d'Argand, faut-il chercher la raison de ce phénomène dans le resserrement général du bloc Asiatique contre le bloc Indien? la montée du granite n'étant, dans ce cas, qu'un résultat de l'effort mécanique subi par la masse continentale comprimée?

Vaut-il mieux, au contraire, suivant les vues originales de Bailey-Willis, voir dans une pression sous-continentale, exercée par le magma granitique lui-même, l'explication du bombement de la plateforme asiatique, et de sa lamination par serrage contre les masses voisines?

Entre ces deux lignes de pensée, qui ne se contredisent pas au fond, je n'essaierai pas de décider ici.

(9) Cette extension donnant naissance à ce qu'on pourrait appeler un faciès "péri-mongol" (cf. fig. 1). Là où il est suffisamment granitisé, par exemple au Hsishan de Pékin, le faciès péri-mongol peut devenir exactement semblable au faciès mongol.

Et enfin nous entrevoyons, pour finir, un moyen d'interpréter, dans la généralité de ses caractères stratigraphiques, lithologiques et tectoniques, une des plus curieuses physionomies de l'Asie Centrale. Voilà ce qu'il me reste à montrer.

III. — INTERPRÉTATION GÉNÉRALE DU FACIÈS MONGOL. LA GENÈSE D'UN DÔME.

Reportons-nous à la figure 2, ci-dessus donnée, où se trouvent schématiquement exprimées la succession et la composition des terrains sur l'ensemble du territoire mongol.

Impossible, me semble-t-il, d'étudier cette section globale sans y reconnaître, *reproduits et agrandis à une échelle régionale*, les mêmes traits structuraux précisémmt que ceux dont l'association caractérise, à des dimensions réduites, et comme en miniature, chacun des compartiments élémentaires en lesquels se subdivise, comme une marquerterrie, la plateforme gobiennne.

Cette répétition des couches détritiques périodiquement comprimées et envahies de roches acides; cette diminution graduelle du serrage et de la granitisation, et, simultanément, cette augmentation progressive du grain des sédiments, vers le haut; cette accumulation finale de dépôts, conglomératiques et lacustres, exact équivalent des formations de piedmont le long d'une chaîne: tous ces caractères ne trahissent-ils pas la présence et le jeu d'un vaste bombement à large rayon de courbure, dont les diverses flexures locales et leurs joints éruptifs ne seraient que les rides harmoniques et les événements linéairement distribués?

Et telle est bien, en définitive, la figure qui paraît rendre le meilleur compte des faits géologiques constatés.

Imaginons la genèse du Gobi, non pas comme la destruction progressive de quelque haut-fond, ou bouclier, rigide et statique, — mais comme le lent soulèvement et la lente expansion d'une voûte tectonique; — une voûte qui aurait périodiquement libéré par rupture l'excès mécanique et magmatique de ses tensions internes accumulées: et, du même coup, c'est le Plateau Mongol qui devient intelligible dans les lignes majeures de sa composition et de son histoire.

Dans cette hypothèse, en effet, d'un dôme en voie de surrection, nous trouvons d'abord une raison profonde aux caractères détritiques et lacunaires de la série géologique sur ce domaine: transgression Sinienne limitée aux zones marginales; complète absence de la série

Teilhard, 1943), rompues suivant leur axe longitudinal, et pénétrées de produits acides suivant la déchirure, — une série, autrement dit, de "joints continentaux" injectés, — voilà ce qu'il est difficile de ne pas voir dans cet arrangement et cette structure.

Ceci posé, imaginons que le pays de Jehol se comprime et s'injecte encore davantage, jusqu'à réduire ses grès et ses argiles en graywakes et schistes granitisés. Imaginons encore que, par-dessus ce premier cycle de bassins faillés et comprimés, d'autres bassins se forment, et soient à leur tour comprimés, faillés et dynamo-métamorphisés. Répétons le processus une troisième fois, si cela est nécessaire.

Je pense que le résultat de ce traitement serait de reproduire exactement le faciès mongol.

Dans leur ouvrage fondamental sur la Géologie du Gobi (1927), Berkey et Morris imaginent le Plateau Mongol comme envahi souterrainement par un vaste batholite granitique sur lequel les couches de Khangai flotteraient sous forme de lambeaux suspendus. Je tends, personnellement, à me le représenter plutôt comme un système de compartiments verticaux, alternativement schisteux, gréseux ou conglomératiques, partout cloisonnés de granites ou de porphyres suivant les joints: un "froncé" de flexures rompues, étroitement pressées les unes contres les autres en un faisceau serré.

Cette seconde hypothèse a plusieurs avantages.

Tout d'abord, un même mécanisme de serrage, de rupture et d'injection ayant joué, à plusieurs reprises, sur un matériel de même faciès, à travers de longues périodes géologiques, nous comprenons mieux nos difficultés à démêler, parmi les andésites, les porphyres, les granites et les schistes appartenant au complexe gobiien, ce qui revient au Jurassique, au Trias, au Permien, au Carbonifère, et peut-être même (dans l'Ouest) à des formations plus anciennes encore⁽⁸⁾.

Nous sommes amenés à soupçonner, du même coup, que le développement postérieur des bassins Crétacés et Tertiaires mongols, avec son accompagnement de failles et de laves tardives, pourrait bien n'être que la forme atténuée du même processus de "flexuration" se poursuivant, au delà du Jurassique, à la surface du vieux socle granitisé.

(8) C'est largement peut-être à cette structure hâchée, donnant à l'érosion une prise facile, que le Gobi doit sa remarquable pénélaination. Il est curieux d'observer, à ce propos, comment, au sud et à l'est de Turfan, les roches de faciès mongol se prolongent sous forme de plateforme relativement basse, — tandis que, juste à côté, les hautes cimes du Tienshan consistent entièrement en puissantes masses sédimentaires, à peine granitisées. (cf. Teilhard, 1932b, p. 390).

A quoi cette disposition en écaillés comprimées ou dressées peut-elle bien tenir? et en quoi cette structure peut-elle bien nous aider à mieux comprendre la genèse particulière du Plateau Mongol?

Afin de résoudre le problème il nous faut, je crois, sortir du Gobi, et nous transporter dans des pays limitrophes, tel que celui de Jehol, où la tectonique mongole a des chances de nous apparaître à l'état inchoatif, sous une forme simplifiée (fig. 5.).

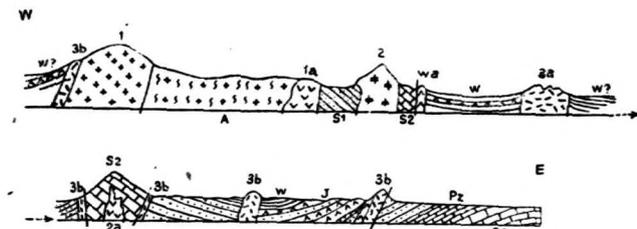


Fig. 5. — Une coupe à travers les bassins Mésozoïques faillés de la Province de Jehol (cf. Teilhard, 1940, p. 363).

A, Archéen. S1, quartzite Sinien. S2, calcaire Sinien. Pz, Paléozoïque (Cambrien-Carbonifère). 1-1a, granite Mongol, et diorite. J, couches Jurassiques à Plantes, avec coulées d'andésites. 2-2a, granite du Yenshan, et diorite. W, Crétacé Inférieur (couches à Lycoptères), avec nappes et neck (Wa) d'andésite. 3a-3b, micro-granite et rhyolite Crétacés (post-Wealdiens), surtout dans les joints tectoniques. — Entre la moitié supérieure et la moitié inférieure de la coupe (longues chacune d'environ 40 Km.) la structure du pays se maintient sensiblement la même, sur 100 Km.

Plus comprimée, plus injectée, plus dynamo-métamorphisée, cette série de Jehol reproduirait exactement (cf. fig. 3 et 4) le faciès mongol.

J'ai, à plusieurs reprises déjà (cf. Teilhard, 1926, 1932a, 1940), insisté sur les caractères tectoniques particuliers au territoire compris entre le Golfe du Petchili et le Khingan méridional. Essentiellement, la région en question consiste en une succession de bassins Jurassiques ou Crétacés, séparés les uns des autres par une série de barrière rigides, chacune formée de roches dures (calcaires Siniens, surtout) ayant traversé, comme à l'emporte-pièce, la masse relativement molle des sédiments Mésozoïques. A quoi il faut ajouter que des roches acides (rhyolite et granodiorite) ont fait irruption par toutes les fissures ouvertes dans le corps, ou sur les flancs, de chaque unité calcaire "diapire"⁽⁷⁾. Un système de flexures parallèles (cf.

(7) Dans de nombreux cas-limites, le calcaire (ou autre roche de fond) n'émerge pas, et la barrière se réduit à un dyke granitique ou porphyrique surgissant au milieu des terrains Mésozoïques.

II. — ALLURE TECTONIQUE DES ROCHES MONGOLES.

UN FAISCEAU SERRÉ DE FLEXURES ROMPUES.

Ce qui, au moins autant que la nature schisto-grés-granitique du sol, intrigue l'observateur en pays mongol, c'est l'allure discontinue et rubannée du socle rocheux qu'il traverse. Jamais, devant lui, de "bonne" section, où les formations s'empilent en série naturelle, lisible; mais, toujours, une succession de terrains étroitement compartimentés, ou de couches redressées, visibles seulement par la tranche. Presque jamais non plus, entre les éléments de cette coupe rabotée, de contact sédimentaire franc, au moins sur de longues distances; mais plutôt la juxtaposition de feuillets hétérogènes, séparés les uns des autres par d'innombrables dykes ou masses lenticulaires de roches éruptives (fig. 3 et 4).

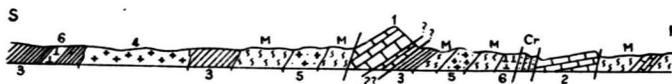


Fig. 3. — Une coupe au nord de Suchow, le long de l'Etsin-gol, en faciès mongol (cf. Teilhard, 1940, p. 351).

1, calcaire Sinien, marmorisé. 2, calcaire Carbonifère à Coraux. 3, schistes de Khangai. 4, granite du Tianshan. 5, aplites rouges. 6, microgranite et rhyolite (Trias?). M, mylonite. Cr, conglomérat Crétacé, redressé.

Longueur de la coupe, 50 Km.

Observer l'étroit compartimentage des sédiments et des roches intrusives.

N.B. — Sur cette figure, et les suivantes, les formations sont énumérées dans l'ordre présumé de leur succession naturelle.

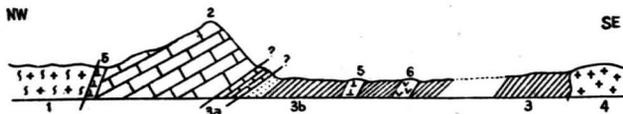


Fig. 4. — Une autre coupe, à l'est de l'Etsin-gol, en faciès mongol. (cf. Teilhard, 1940, p. 353).

1, granite Archéen. 2, calcaire Sinien, marmorisé. 3, schistes de Khangai (Carbonifères?). 3a-3b, calcaire fossilifère et couches de Khangai (Ouralo-Permienne?). 4, granite du Tianshan. 5, microgranite. 6, andésite (neck).

Longueur de la coupe, 50 Km.

Grès à Dinosauriens et couches feuilletées à Poissons du Crétacé Inférieur.

Loess rose à Dinosauriens et terres rouges concrétionnées, à petits Mammifères, du Crétacé Supérieur.

Sables argileux fossilifères de l'Eocène Inférieur (Paléocène).

Terres rouges, sables et graviers, richement fossilifères, de l'Eocène Supérieur et de l'Oligocène (Couches à *Titanotherium*).

Argiles rouges basales, sables à *Lamprotula*, et argiles blanches lacustres du Miocène Supérieur (Couches à *Platybelodon*).

Argiles rouges d'altération et couches blanches, lacustres, Pontiennes.

Disséminés dans une série de dépressions faiblement gauchies et rarement faillées, — exceptionnellement en contact direct les uns avec les autres, — jamais traversés de roches acides, mais seulement d'andésites et de basaltes, — ces divers dépôts, peu épais, et mal consolidés, ne forment à la surface du Plateau Mongol qu'une simple couverture discontinue, vite découpée par l'érosion en "bad lands" dont la vue, familière à l'explorateur de ces régions désertiques, fait immanquablement battre le cœur du paléontologiste.

Et puis tout s'arrête, — ou à peu près.

En opposition saisissante avec ce qui se voit, plus au sud ou plus à l'est, au-delà de la Grande Muraille, rien ou presque rien ne représente, sur le Gobi, les puissantes accumulations de sables et de terres rouges ou jaunes si distinctives du Villafranchien et du Pléistocène en pays chinois.

Ici ou là quelques terrasses de graviers cimentées, ou quelques dunes consolidées, ou quelques dépôts feuilletés laissés par d'anciens "nors" ... Et c'est tout.

S'il y a jamais eu quelque chose de plus, le vent l'a balayé.

Extrême prédominance, sur une large portion de l'Asie Centrale, à travers tous les temps géologiques, de sédiments détritiques continentaux, périodiquement granitisés (jusqu'au Crétacé), et de plus en plus grossiers ou désertiques: voilà, pour résumer, ce qui explique, aux yeux du géologue, les particularités du "faciès mongol".

Mais cette prédominance, justement, de sables, d'argile et de granites, à quoi l'attribuer? et comment l'expliquer, elle-même?

Pour répondre à cette question, il nous faut d'abord étudier d'un peu plus près la structure ou allure tectonique des formations dont nous venons de donner la liste.

de veines de quartz. Au voisinage du granite s'observent des auréoles de diorite et de cornéennes. Mais, dans l'ensemble, le métamorphisme de cet âge ne présente pas un caractère vraiment régional⁽⁴⁾.

A ces granites, d'âge Paléozoïque Supérieur (il y en a apparemment de deux âges, les uns post-Viséens et les autres post-Permiens, correspondant à deux phases orogéniques distinctes, — cf. Teilhard, 1940) j'ai donné respectivement le nom de "Granite du Tienshan" et de "Granite mongol"⁽⁵⁾.

c) Succédant à son tour, encore en discordance angulaire, aux grès et schistes de Khangai, vient alors, pour finir, une autre série détritique (grès et conglomérats) représentant le Trias et le Jurassique. Bien plus limités dans leur extension que les couches de Khangai, plus grossiers de grain, bien moins dynamo-métamorphosés aussi (ils contiennent encore des traces de végétaux, mal déterminables), ces dépôts Mésozoïques sont traversés de nombreux dykes prophyriques, et même localement envahis par un granite spécial, — le fameux "Granite du Yenshan", si caractéristique des plissements Jurassiques en Asie péri-Pacifique⁽⁶⁾.

La Couverture. — Soubassement Archéen, complexe Paléozoïque de Khangai, grès et conglomérats Mésozoïques; tous les trois intimement soudés entre eux par actions tectoniques et de métamorphisme.

C'est dans les bassins successivement creusés par l'érosion ou les mouvements du sol à la surface de ce socle résistant et nivelé que se poursuit et s'achève, à partir du Crétacé, l'histoire sédimentaire du Plateau Mongol.

(4) Sauf en certaines régions limitées telles que le Nord de l'Alashan (cf. Teilhard, 1932b, p. 374), le Peishan, et la bordure méridionale du Tienshan, à l'Ouest de Turfan.

(5) Malgré cette abondance de granite intrusif dans leur masse (et peut-être à raison de leur nature gréseuse, difficilement imprégnable et métamorphisable) les couches de Khangai sont d'une pauvreté déconcertante en minéraux et minéraux intéressants. Cette stérilité a été notée par tous les observateurs. (Cf. Berkey, 1932, p. 589).

(6) En bordure orientale du Plateau Mongol, c'est-à-dire à partir du Khingan, — là où les intrusions granitiques deviennent plus abondantes, les mouvements tectoniques plus intenses et les dépôts d'un faciès plus vaseux —, les caractères lithologiques de la formation ici considérée finissent par être identiques à ceux des couches Paléozoïques de Khangai. Dans l'Ouest, au contraire, à partir du Peishan, le Jurassique semble avoir complètement échappé à la granitisation.

a) Tout-à-fait à la base, un vieux fondement Précambrien est d'abord reconnaissable, formé de masses granitiques ou dioritiques écrasées (Archéen), associées à des roches cristallophylliennes ou hautement métamorphiques (micaschistes, chloritoschistes, amphibolites, quartzites, et plus rarement minces couches de marbres ou cipolins). Dans ce complexe, la série cristallophyllienne (Série de Wut'ai) est communément regardée comme plus jeune que les granites Archéens (ou Série du T'aishan), mais sans preuve bien décisive pour le moment. Ceux-ci pourraient avoir métamorphosé celle-là.

b) Reposant en complète discordance sur ce vieux fond granité, et beaucoup plus récente que lui, apparaît alors une remarquable accumulation de grès et schistes gréseux, de teintes sombres (série de Khangai), ne contenant aucun fossile (pas même de traces de végétaux), mais associés à des bancs, peu épais, de calcaires marins, quelquefois Dinantien ou Viséens, plus souvent Ouralo-Permiens⁽¹⁾. Bien que (pour des raisons tectoniques données plus loin) la position exacte de ces calcaires dans les grès et schistes soit difficile à fixer, la Série de Khangai (si on la considère dans la partie centrale du Gobi⁽²⁾) peut être regardée, dans l'ensemble, comme d'âge Paléozoïque Supérieur (parti Carbonifère et parti Ouralo-Permienne; cf. fig. 2).

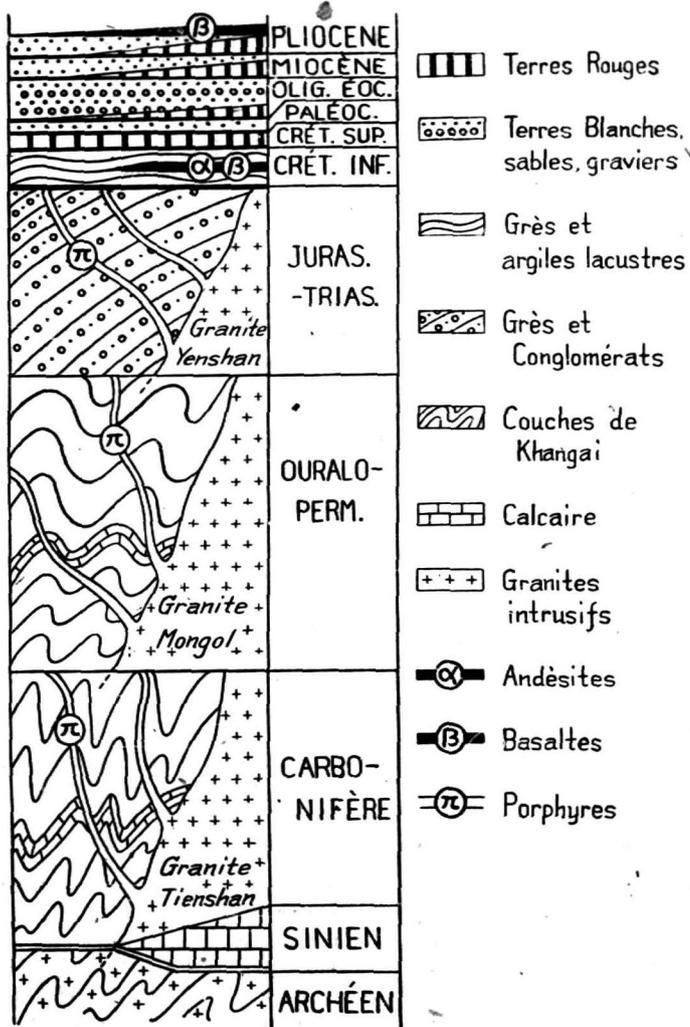
En dépit de leur extraordinaire extension, et malgré une apparence "redressée" qui n'est souvent qu'un effet de schistosité verticale, les couches de Khangai n'ont sans doute qu'une épaisseur modérée; et rien ne permet, à mon avis, de les considérer comme un dépôt de type vraiment "gésynclinal". Plutôt que dans un fossé profond, elles paraissent s'être déposées en surface et en bordure d'un dôme en voie d'érection. Mais de ceci nous nous occuperons plus loin.

Presque partout, la formation est envahie de masses granitiques⁽³⁾, se prolongeant dans les schistes par un extraordinaire chevelu

(1) Entre l'Archéen et la Série de Wut'ai s'intercalent localement (surtout dans le sud du Gobi) des masses de calcaire silicifié et marmorisé, probablement Siniennes (fig. 2). Ces masses, toujours isolées, semblent représenter, au milieu des schistes de Khangai, les vestiges de lambeaux "diapirs" (fig. 3 et 4).

(2) Vers l'Est, à partir du Khingan, le "faciès de Khangai" monte dans le Jurassique; tandis que à l'Ouest, vers le Peishan, il descend peut-être dans le vieux Paléozoïque (cf. Teilhard, 1940, p. 371).

(3) Ces masses forment généralement des ellipses plus ou moins allongées, variant de quelques centaines de mètres à plusieurs kilomètres de plus grand diamètre.



← Fig. 2. — Succession des terrains en faciès mongol (schématique).

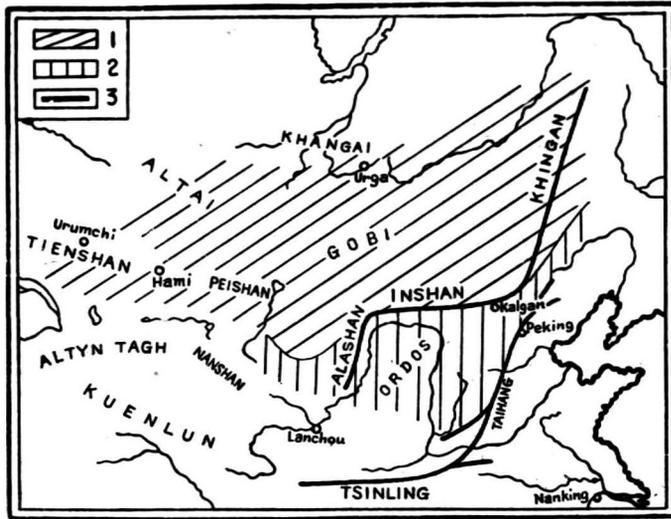


Fig. 1. — Carte montrant l'extension, en Asie Centrale, du faciès mongol.

1. *faciès mongol*: Sinien absent, sauf en bordure; Cambro-Ordovicien absent; Carbonifère et Jurassique sans charbon dans les zones centrales; couches plus ou moins granitisées jusqu'au Jurassique (inclusivement).
2. *faciès péri-mongol* (voir ci-dessous, note 9): Sinien et Cambro-Ordovicien marin présents; Carbonifère et Jurassique riches en charbon; granitisation très localisée, et au Jurassique seulement.
3. *flexures Jurassiques* majeures, granitisées.

I. — COMPOSITION DES ROCHES MONGOLES: GRANITES ET SÉDIMENTS GRANITISÉS

Le Socle. — D'une façon générale, on peut dire que 95% des affleurements rencontrés par le géologue en pays mongol consistent en roches granitiques ou granitisées, de divers âges, et en leurs produits d'altération immédiate (grès et schistes gréseux) (fig. 2).

Observer, de bas en haut: a) les trois phases de granitisation, correspondant à trois phases orogéniques distinctes; b) la diminution du plissement des couches; c) l'augmentation du grain des sédiments, ou de leurs caractères désertiques; d) le contraste entre le socle granité et la couverture post-Jurassique.

Considérée dans son ensemble, cette série exprime les phases successives d'un large mouvement de flexuration, comparable par exemple (en beaucoup plus compliqué et en beaucoup plus étendu) à celui du Hsishan de Pékin (cf. Teilhard, 1943, fig. 2).

UN PROBLEME DE GEOLOGIE ASIATIQUE LE FACIES MONGOL

par

P. TEILHARD DE CHARDIN

(Institut de Géobiologie, Peking)

Entre 85 et 120 degrés de longitude, et 40 et 50 degrés de latitude, sur le million et demi de kilomètres carrés occupés par le Plateau Mongol proprement dit et par ses prolongements au nord et au sud du Tienshan (fig. 1), la plateforme asiatique présente une curieuse homogénéité de caractères. D'un bout à l'autre de ce vaste quadrangle, c'est-à-dire des steppes gazonnées du Khingan aux déserts pierreux du Peishan, le voyageur peut faire deux mille kilomètres sans avoir l'impression de changer essentiellement de pays. Toujours, devant lui, les mêmes lentes ondulations du terrain, — les mêmes dépressions ensablées, — les mêmes crêtes rocheuses se relayant en coulisse de l'est à l'ouest.

Si notre voyageur est simplement géographe, ethnologue ou naturaliste, il risque de mettre cette uniformité sur le seul compte des conditions désertiques prévalant au cœur d'un vaste continent.

Mais s'il est aussi géologue, il s'aperçoit vite que la singulière monotonie du pays qu'il traverse est toute autre chose qu'un vêtement de surface.

Ce qui transparait et s'exprime dans l'homogénéité du pays mongol, ce n'est rien moins qu'une double identité de fond, pénétrant les fondations mêmes du substrat géologique: identité de composition, et identité de structure. Sous-jacent à l'unité climatique, floristique, faunistique des régions gobiennes, un autre type d'unité, à la fois lithologique et tectonique, marque, d'une façon impressionnante, les vastes étendues pénéplainisées comprises entre la Sibérie et le Fleuve Jaune.

C'est de ce *faciès mongol de fond*, si important pour quiconque cherche à comprendre la structure et la genèse de l'Asie, que je me propose ici de fixer les traits essentiels et de donner une interprétation plausible.

徵稿簡約

一 本刊接受外稿。
稿件標準如下：

甲 關於中央亞細亞之學術研究及調查。所包括之地域為新疆，甘肅，青海，寧夏，西藏，西康，內蒙古及蘇聯領中央亞細亞諸國。

乙 可供中央亞細亞之調查研究作為參考資料者。

三 來稿文體不拘；但須繕寫清楚，附加新式標點。稿末並應註明投稿人真實姓名及通訊地址。

四 來稿經發表後，由本會酌致現金為酬，每千字五元起計算。其價值特殊者，得另洽優待辦法。投稿人却酬者，請預先聲明。

五 來稿因性質不合或其他理由不能登載時，由本會負責退還；並附贈本刊一冊，以答雅意。

六 來稿請逕寄北京南池子四十七號中央亞細亞協會編輯部。

中央亞細亞 第三卷·第二期·合刊

中華民國三十三年四月二十五日出版

編輯人 姚 鑒
北京南池子四十七號

發行所 中央亞細亞協會編輯部
北京南池子四十七號
電話東(五)五〇六四

印刷所 武 德 報 社
北京王府井大街一七
電話東(五)二九三一

價 目	
中央亞細亞	一年、四、七、四期
每卷四期	定價拾陸元(郵費在內) (國內國外一律)
每期一冊	定價肆元(郵費在內) (國內國外一律)

注意：本刊論著未經同意時不許轉載或翻譯

中華民國三十三年四月二十五日出版

中 央 亞 細 亞 協 會 發 行

中央亚细亚

1

本片卷

自 1942 年 1 卷 1 期

至 1944 年 3 卷 2 期

本刊
摄制完